

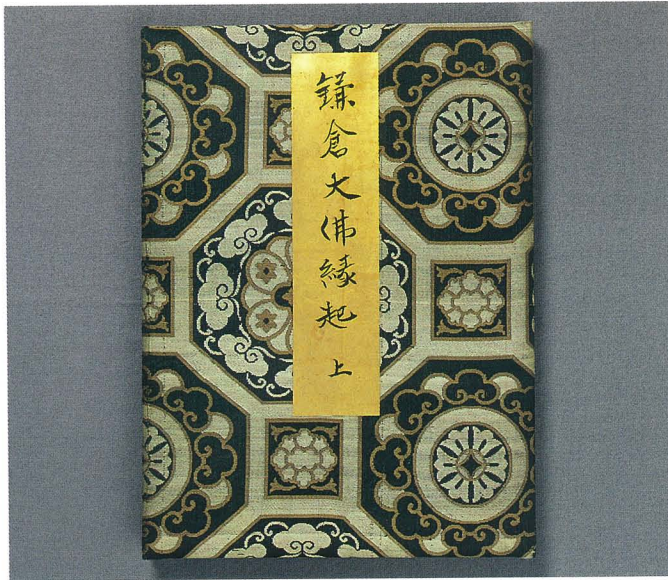
鎌倉大佛殿記

鎌倉大佛殿高德院

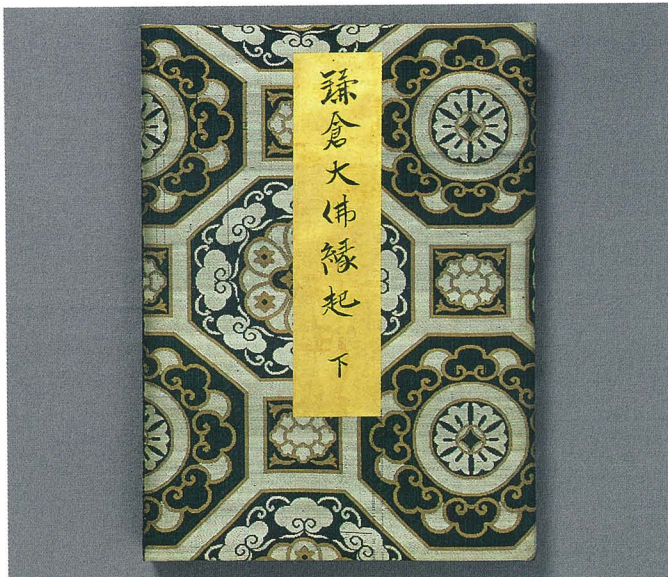
鎌倉大佛孫記



国宝 阿弥陀如来坐像 鎌倉大佛殿高德院



鎌倉大仏縁起 上巻 表紙



鎌倉大仏縁起 下巻 表紙

相模國鎌倉大佛殿紀略上
 抑々別後念深き里ね家大佛の重化元
 こそ南無は後今か國東の敷出分も
 かなきも〜〜〜と人志路六八の帝聖武
 て中收を祝香の化祝〜と大慈の殿於と
 疑〜と公御徳万成あり〜とまそく〜と年九
 丁せの中未二月保念各所明を〜と〜と所
 東創又條の再渡り甚ま在條の因甚なり
 相傳付者〜と〜と一切の事なり
 取合は二艘を備ふたぬ國〜と〜と事なり
 津波もて勸建〜と甚ま廣氏辨僧も其條
 傳ふ〜と〜と人救法院と書させ〜と〜と
 又〜と秋迦葉傳記を言の事條と〜と書せり
 亦の趣國分寺なり〜と〜と新傳分〜と〜と法外
 國分も建立の持興なり〜と〜と在條の存運
 を我守事〜と甚ま廣氏辨僧も其條の因甚なり

鎌倉大仏縁起 上巻

此年〜と〜と承安の年〜と〜と國八月各々
 寺も〜と〜と尾邊の道入道年三所在寺尉薩液
 寺傳記使〜と〜と巡檢〜と〜と切來紀
 一〜と〜と大佛殿堂作〜と〜と〜と
 清その〜と〜と後寛元元年〜と〜と百忽佛殿始
 小〜と〜と物も〜と〜と大佛も〜と〜と成り
 今〜と〜と快慶の坊傳〜と〜と年月〜と〜と依
 此の在者皆悉〜と〜と〜と〜と〜と
 房方〜と〜と如き〜と〜と大柱〜と〜と〜と今國の在條
 條も〜と〜と〜と約年條木願郷〜と〜と〜と
 高〜と〜と坊方〜と〜と夫〜と〜と感念〜と〜と〜と料又無
 今〜と〜とあり〜と〜と〜と〜と〜と後條傳記
 建長年〜と〜と八月十七日〜と〜と家も〜と〜と親との人外渡
 今〜と〜と國分寺傳の事〜と〜と佛の在條〜と〜と
 多〜と〜と成り〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
 坊〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

鎌倉大仏縁起 上巻

目次

『鎌倉大仏縁起』の翻刻に寄せて

第十五世住職 佐藤 孝雄…………… 9

◇

鎌倉大仏縁起 上

…………… 13

鎌倉大仏縁起 下

…………… 34

鎌倉大仏縁起 [補注]

…………… 58

大仏高德院略記

…………… 79

『鎌倉大仏縁起』の成立をめぐる

鈴木 良明…………… 97

◇

鎌倉大仏のあゆみ

第十三世住職 佐藤 密雄…………… 117

——大仏はこうして鎮座された

鎌倉大仏由来

第十四世住職 佐藤 行信…………… 133

あとがき

清水 眞澄…………… 147

『鎌倉大仏縁起』の翻刻に寄せて

鎌倉大佛殿高德院第十五世住職 佐藤孝雄

「鎌倉大仏」「長谷大仏」と呼ばれ、今日多くの人々に親しまれている高德院の本尊、国宝阿弥陀如来坐像。国内外に数多ある仏像のなかひとときわ著名なこの鑄造仏の来歴は、いまだ多くの謎に包まれています。

けれども、いわば「過去と未来」「自然と文化（人）」を貫く二軸の交点に坐すとも解せるこの鑄造仏は、歴史学をはじめとする人文社会科学から自然科学、物理化学に至るまで実に多くの学問分野を取り込む学際的研究の対象となり得ます。そして、その学際性を志向する上で、大仏に関するあらゆる関連資料と研究成果の内容を専門以外の者にも分かり易い形で開示してゆくことは、不可欠な作業となるでしょう。

こうした認識にたつとき、大仏の来歴について詳述する数少ない史料として、享保年

間に作成され、今日、高德院に伝蔵される二本の縁起についても、その内容を校訂・翻刻し、研究資料として広く活用を図る必要があります。実は、亡き先住浄誉行信上人もその必要性を強く感じ、既に一九七一年、自ら同縁起の校訂・翻刻を手掛けられました。けれども、その成果物たる『鎌倉大佛縁起 寺伝』は、残念ながら、発行部数も僅かであったこともあり、今日ごく限られた人のみにその存在が知られているに過ぎません。

そこで、このたび新たに、一九九四年行信上人の発案によって組織された「鎌倉大仏史研究会」の諸氏のご協力を仰ぎ、同縁起の再校訂を試みるとともに、同じく高德院に伝蔵され『縁起』を補完する史料ともなる『大仏高德院略記』〔二八〇七（文化四）年成立〕をも翻刻し、一冊の本に纏めることと致しました。

創建当時の様子を伝える数少ない中世史料である『吾妻鏡』の記載に従えば、折しも大仏鑄造開始から七五〇年目の節目に当たる本年、その記念事業の一環として、これら伝蔵史料を翻刻できましたのも、一重に御仏のお導きと心得ます。末文ながら、本翻刻の作成にご助力を賜った、鈴木良明先生、清水眞澄先生、高橋秀榮先生、福島金治先生、吉原健一郎先生に厚く御礼申しあげ、ご挨拶とさせていただきます。

(表紙貼題箋)

鎌倉大仏縁起 上

(表紙貼題箋)

鎌倉大仏縁起 下

凡例

- ・ここに翻刻する『鎌倉大仏縁起』は鎌倉大佛殿高德院所蔵本（甲本）を底本とした。
- ・『鎌倉大仏縁起』は、既に昭和四十六年、故佐藤行信師の校訂によって「鎌倉大佛縁起寺伝」として刊行されている。佐藤行信師校訂本は本文中に送りかなやルビ・傍注、また要領のよい頭注をかかげ読みやすく編集されているが、今回の翻刻にあたっては佐藤行信師本を尊重し頭注をそのまま残しつつその他を再校訂した。
- ・翻刻にあたっては概ね原資料の体裁に従ったが、漢字は原則として当用漢字体のあるものについてはこれを用いた。ただ変体仮名は現行の平仮名に改めた。また読解に便するため句点・読点・並列点を付した他、佐藤行信師本と『鎌倉大仏縁起』乙本を参考に難解漢字に、適宜ルビを付した。ルビは新仮名づかいとした。
- ・明らかな誤字や脱字、難解字、或いは理解を助けるため、当該箇所右方に（ ）を付し適宜注を施した。また補注するも疑問の残る箇所には右側に（……カ）と傍注した。
- ・文中に新補注のため番号を付した。後掲補注解説を参照されたい。
- ・本文中に身分などにかかわる不適切な表記があるが、原文の歴史性を考慮しそのままとした。
- ・翻刻・校訂及び補注解説は鎌倉大仏史研究会が行った。

(外題)
「上 鎌倉大仏縁起 上」

相模国鎌倉大仏殿縁起卷上

鎌倉大仏は天平九年三月
月関東総国分寺として
聖武天皇の勅願により
行基開基す

奉行染屋時忠

一切経船載の唐船金沢
三艘ヶ浦に漂着す

聖武天皇この地に清浄
泉寺を建て関東総国分
寺となさしめ給ふ

抑相州鎌倉深沢の里⁽¹⁾なる大仏の霊地ハ、元これ南閻浮提⁽²⁾大日本
国東の惣国分寺⁽³⁾として、かけまくもかしこき人王四拾五代の帝聖武天
皇、救世観音の化現⁽⁴⁾として大悲の勸願を凝し、国土安穩、万民けらく⁽⁵⁾
のために、天平九丁丑の歳三月、染屋太郎時忠⁽⁶⁾を奉行として御草創、
文珠の再誕、行基菩薩⁽⁷⁾の開基なり。相伝、往昔もろこしより一切経を
のせ奉りし船、金沢三艘が浦⁽⁸⁾に着ぬ。因て聖武皇帝、この清浄泉寺を
勅建し、行基菩薩⁽⁸⁾・良弁僧正⁽⁹⁾・菩提僧正⁽¹⁰⁾に詔して大般若経を書

丈六の釈迦・葉師・觀世音像を安置す

聖武天皇・行基・良弁・菩提の四聖同心の發願

光明皇后の勸發

清淨泉寺の寺号の由来

御輿ヶ嶽

写せしめて奉納し、丈六⁽¹⁾の釈迦・葉師・觀世音の尊像を本尊として、東の惣国分寺となし給ふ。所謂大日本国六十余州国分寺建立の権輿なり。是則、本地大菩薩の応迹⁽²⁾、本願皇帝・行基菩薩・良弁僧正・菩提僧正の四哲をもつて国分寺艸創同心の四友と称す。衆生利益⁽³⁾のはかりことをめくらし、同時に出世し、あらかしめ御后光明皇后⁽⁴⁾の觀發致請⁽⁵⁾をまちて、今まさに仏道を興隆し給ふへきの最初たり。是を四聖同心の宿願、仏法弘通の草創とハ、申奉るものなり。然るに行基菩薩此寺を清淨泉寺⁽⁶⁾と名つけ給ふ事は、往昔秋の頃、忽然真人ひとり黒き馬に騎て雲を躡、空を翔て飛こと電光のこたく、富士の巔を降り馬を深沢の嶺上に駐、則清泉を汲、馬口に漱、此時山神化し来て輦輿を捧献し、珍饌を薦餉す。爾しより郷党是を伝へて御輿ヶ嶽⁽⁷⁾と称せり。方此靈地をもつて此処に東の惣国分寺と

内の堂

水無能瀬川

地蔵橋

曆仁の頃鎌倉大仏建造
さる

造頭の由来

俊乗坊重源南都の大仏
を再興す

頼朝、政子及び頼家を
伴ひ落慶供養に臨む

侍女稲多野局扈從す

して一梵宇を營、清淨泉寺と名つけて永く鎮護国家の上方を開給ふ事、此

所謂なり。彼大般若經并丈六の釈迦・薬師・觀世音の三尊安置の所を、

いつ頃よりか内の堂とよべり。今、寺の東北の角なる水田は則その旧跡

なり。又惣門の内に川あり。稻瀬⁽¹⁵⁾と名つく。又水無能瀬河⁽¹⁶⁾といへり。

此川古き名所なり。此川に橋あり、下乗橋といふ。或は地蔵橋⁽¹⁷⁾ともよへり。世々の集に載たり。

其後曆仁の頃ほひにいたりて、今の大仏ハ造立ならせ給ふ。謹て其由を

尋に、治承の乱⁽¹⁸⁾に南都の大仏殿平氏の災にてうせにしかハ、俊乗坊重

源⁽¹⁹⁾上人に勅して諸国を勧進せしめ、大殿本のことに成就してけり。

時にその大殿供養の守護として右大将源頼朝卿⁽²⁰⁾を南都へめされけるか、

結縁のためにやありけん、北方⁽²¹⁾・若君⁽²²⁾をも同しくいさなひ給しかハ、

稲多の局⁽²³⁾もしたかひ奉りぬ。則東大寺の縁起に、建久六年三月十二日

大仏殿の供養⁽²⁴⁾、後鳥羽院⁽²⁵⁾ 行幸あり。供養導師興福寺の別当権僧正覺
憲⁽²⁶⁾、咒願師⁽²⁷⁾ 当寺の別当権僧正勝賢⁽²⁸⁾、其外の衆僧人数天平の供養に
ことならず。勅定⁽²⁹⁾によりて頼朝相模国より拾万騎を率⁽³⁰⁾し南都に上洛あり、
大仏殿を三重に守護せり。則頼朝ハ、大仏殿の北中門⁽³¹⁾に着し、ミつから中
門の柱に判形をすへ、後代の龜鑑とそなへ侍り。その日のきとく一にあら
す。普賢菩薩白象⁽³²⁾に乗して供養の砌⁽³³⁾へ出現し給へり。又雷神大仏殿の大庭
に落下けるに、参詣の道俗色を交し、貴賤たましむをうしなひしか、雷神
も結縁のためなりしかハ、少もさいなんをなさず、大仏を三返行道⁽³⁴⁾し、虚
空⁽³⁵⁾をさしてあかりぬ。又当寺戒壇院⁽³⁶⁾の西光上人⁽³⁷⁾ 夢に、大仏殿の御宝
前におゐて広目天⁽³⁸⁾の金札に参詣の貴賤男女の名字を一くにしるし付け給
ふと見侍り。まことに大仏殿参詣の結縁は広大の功德疑なきもの哉と記せ

頼朝関東に大仏を建造
せんと祈念して遂に果
さず

り。こゝに右大将源頼朝卿ハ彼ゆゑ、しき御供養を拜給て、こゝろに深く古への聖王・今の明君、仏陀を崇敬してねんころに天下国家の護治を祈せ給ふ。万民豊樂のための御恵をつらく想ひ、感たん肝に銘しさせ、又貴僧大徳の説法教化ハ、孝養父母奉事師長を始めとして、五戒十善の御法を説て勸善懲惡し給ふ。無智下賤の輩も聴聞してハ自然と善心に移り、上下君臣・父子夫婦の法を守り、現世・後世因果の理を知ること仏法の第一、是則天下国家治る所の良道、現当の豊樂を求るおもひ大教なり。誠に王法・仏法ハ天下を治るものの左右なるへきとて、殊にありかたく覚えさせ、たちまち誓願し玉ひき。その誓にいわく、又我東国におゐて、かくのこゝろ大像を造り奉りて永く吾妻の護治を祈り奉りなんと、三国無双の大仏盧舍那如来(30)を拜ませ、深くちかハせ給ひき。然るに彼卿身まかり給ひて

稲多野局頼朝の所願を
果さんと鶴岡八幡宮に
祈願す

後、稲多野の局いかなるすく世の善因やもやうしけん、いかにわほけな
き大願をおこして、まつ鶴岡なる八幡宮に詣て、しらにきてをたむけ奉る。
仰き願くはいかにもして我君の所願のことく、此鎌倉に大仏を造り奉らし
と、いともたふとき誓を立、宿願をこらして冥助を八幡宮へこひ奉る。そ
れより北のかた二位の夫人え御暇をこひ、御みやつかひのつとめをのかれ
て、深沢の里惣国分寺の傍にいほりさし、ひたすら大願をミてん事をおも
ひ、その身をなきものにして、いやしき業も、まつしき事もいとほす、他
のそしりをもおもわす、ミつから我身を苦しめて、彼君の所願をミてんと
あけくれ願ひつゝ、或は月の六齋日（三）にハ伊豆山の櫛をひさき、或ハ賤
のおたまきくる糸のそのあたいをハ皆大仏建立の資料と定め、或ハまた狂
女の風情して日々に糊を練りてハ貴家高門・下部町々・浦辻田舎をもおこ

たる事なく賤か業をなし、其あたへを八庵いぢぢりのうしろなる岩窟に納め、其上に八幡宮をいたゞきまつりて、ねん頃にいのられけるか、不思議や、かの岩窟よりおりく光さし、紫雲空にそひきぬと、國中ミな云ひわたりけれハ、北の方二位夫人ハ、いそきかの局をめして、つぶさに其ゆへをきこしめし、夫人も殊に悦にたへす、彼の先君の所願も満足すへしとて、心を局に同して、うやく鋪申て申さく、妾等われらねかわくハ、鶴岡八幡太神御本ほん地無量寿仏じむりょうじゆぶつの³²大仏を造り奉りて、由比よひの汀みぎわに安置し、永く国家安全をいのりなん。仰きこふ、太神加護をたれさせおハしませと、うらなく祈念したまひぬ。將軍頼経公も深く随喜ましくてのたまはく、此女房はつなの発願がんでん、由来年久し。苦行経営して誠に金銭を納め積たる事、堅固勤行こんきんぎんぎょうの女房なり。あに尋常の女房ならんや。今また現に不思議の光瑞こうずいを感じる事、是

將軍賴經、重源の弟子
淨光をして都鄙に勸進
せしむ

曆仁元年二月工を起し
同年五月に御頭を挙げ
鎌倉大仏造頭は四条天
皇の勅命に基づくとの説

姫糊

紫雲窟
御光山

則權聖の化女(ん)ならしと、あつくも御信感(ん)まし／＼つゝ、因て大外護(ん)となら
せ給ひ、南都大仏の例になそらへて、彼重源上人の高弟、遠江国の人淨光
上人(33)といへるたうときひしりをまねかれ、觀進(勸)の大沙門となして都鄙
をくわんしんし、卑尊奉加せずといふ事なし。すてに諸国に縁を募せ給ひ
しかハ、終に曆仁元年戊戌三月廿三日に始を起して(34)、大仏殿の営作を
企、程なく同五月十八日、大仏の御頭(みぐし)を挙奉りぬ。相伝(あひつたう)、人王(ひと)八十六代の
帝(みかど)四条院の御時曆仁元年に賴經公上洛(35)して、吾妻(あづま)におゐて大仏を造り
奉るへきの命をうけたまふ。此故に世々四条院の御建立と申なり。關東に
て糊・楳(しきみ)を賤(しず)か妻の業(わざ)と成る事、此稲多野より始まる。その頃より此糊を
姫のりとは申なり。紫雲光明(い)の出たる岩窟を紫雲窟と名つけ、光明の覆(おおい)た
る山を御光山と申なり。守護の爲にとて八幡宮の小社(はこら)(36)を岩窟の上にい

小八幡宮

仁治二年三月大仏殿上棟す

將軍賴經罪科人の過怠料を以て大仏殿の修営に充てしむ

寛元元年六月大仏並びに大仏殿落成により開眼供養を行ふ 八丈の木像 導師良信

た、きまつりしを、賴經卿建立なし給ひて、小八幡宮と御額を給はるものなり。夫より四箇年の月日を経て仁治二年辛丑三月廿七日に、大仏殿の棟上の儀式⁽³⁷⁾、誠に將軍家の御外護⁽³⁸⁾、諸大名御衛護最もゆゑ、しき次第なり。同四月廿九日、罪科人の過怠料⁽³⁸⁾を召して新大仏殿の修営に寄進せられへき由、清左衛門尉満定奉行として其御議定有。同仁治四年癸卯二月廿六日、寛元と改元あり。此六月十六日、木像御長八丈の大仏并大殿に至まて残らず落成して、開眼供養⁽³⁹⁾を展⁽⁴⁰⁾。導師ハ良信僧正⁽⁴⁰⁾なり。僧正ハ賴朝卿元暦元年十一月廿六日、先考左馬頭義朝⁽⁴¹⁾の廟を建て梵宇⁽⁴²⁾を營作す。勝長寿院⁽⁴²⁾の別当なり。慶讚の大徳十僧、其外高僧・野僧を請して東大寺大仏殿供養の式に例し、法要・供養の事おわりぬ。信に八幡の御本地を表して無量寿如来の大像を顕し給ひ、東国第壹の護国寺となし給ふものな

鎮守は伊勢神明の別宮

寛喜四年僧淨光和賀江島を築く

寛元末年大風のため大仏殿損壊す

り。されハ鎮守は伊勢神明の別宮⁽⁴³⁾にして、やしるを伽藍^{がらん}の傍^{かたわら}にしめて鎮護をなし給へり。眼^{まなこ}をあけて瞻仰^{せんごう}するものハ忽に十悪の業網^{ごうもつ}をやふり、頭^{こぶせ}をたれて恭敬^{くきぎやう}するものハ永く三途^{さんず}の苦輪^{くりん}を出つへきものなり。勸進の沙門往阿弥陀淨光上人、前の寛喜四年七月十二日、舟船着岸の煩ひ是なきために和歌⁽⁴⁴⁾江嶋を築へきよし、武州泰時御歡喜有り合力せしめ給ふによつて、諸人又同加勢をなす。同七月十五日、平三郎左衛門尉盛綱行むかへの御奉行として和賀江嶋を築始む。同八月九日に嶋成就して⁽⁴⁴⁾、尾藤左近入道・平三郎左衛門尉・諏訪兵衛尉御使として巡検し給ひ、則其功成就し給ふ事も、^{皆是}此大仏殿當作し給ふへき御たよりのためなり。其後寛元の末へ一日、忽大仏殿海風にいらかやふれて⁽⁴⁵⁾、大仏もほとく雨露のために損壊^{かい}ならせ給ふ。かくて年月をかさねなハ、依正^{えしやう}の莊嚴も皆悉くほろひたま

稲多野局金銅の大仏鑄造を將軍頼嗣に請ひ許さる

建長四年八月金銅の大仏成る 五丈余の無量寿仏

殿屋門楼悉く備はる

稲多野局建長五年五月死す 往生時の奇瑞

ひなむことを局ふかくなけき、大願をおこして、金銅の尊像に鑄奉らんことを、時の將軍源頼嗣卿⁽⁴⁶⁾へ申て四方勸られけるに、天も感応まし〜

きや、其料又思ひくまなふあつまりて、人王⁽⁴⁷⁾八十八代後深草院の御宇建長

四年壬子八月十七日、宗尊親王の大外護にて、金銅五丈余の無量寿仏の大

像、いとめてたく成就まし〜⁽⁴⁷⁾、なを大殿・二王門・十二楼まで古に

増りて立ならひしかハ、けにも関東の第一大鎮護の道場とそ見えし、いと

とふとかりけり。稲多野の局も所願を成就して程なくも不例の床につき、

建長五年五月廿三日に身まかりし給ふものなり⁽⁴⁸⁾。往生の時の奇瑞一に

あらずといへとも、中にも諸人挿ミ奉るにハ、西の空に紫雲かゝりて局の

軒端に聳へ、音楽高くきこえ、異香まのあたりに薫して室に満、虚空にハ

妙花の中に仏菩薩の来迎あり。不思議なるかな、初の七日の間にハ局の

遺骸を葬る所のそらに仏の来現・影迎あり。里人寄異の思ひをなし、墓辺にはせ集て、天にあふき地にふして感涙袂をしほり、声をおします念仏して、墓所さらに昼夜のへたてなかりしか、七日も過ぎ去りけれハ、来現の仏も影を移し給す。時に信心の道士、不見の輩におかませしめんとして、広き板に仏来現の様躰を模写しゑかきて墓所に立しより、此墓所を板仏といふなり。それより関東におゐて死する人あれハ、初の七日の間に広板に七本率都婆を一枚に書て墓所に立るを、そとハとハいはす、板仏といふとなり。又或人のいはく、かのつばねの名を稲多野と申たるゆへに、其石碑なれば稲多仏といふなり。又或人のいはく、初七日の内来現し給ふ御仏ハ、則鑄奉る所の仏来り給ふなるへしとて、諸人は鑄たほとけといふとなり。又或人のいはく、此局、常の人にあらす、鑄奉る所の御仏なるへし。今化

康元元年四月大仏開眼
供養を営む

導師に高野山別当理賢
を招くも理賢辞して恵
智坊を派遣す

將軍宗尊親王鶴岡八幡
の供僧をしてこれに代
へしめんとす

女によとなり給へて、衆生利益りやくの爲に我か本仏身を鑄奉るゆへに、此局とりも
なをさす鑄いたほ仏ぼつなりと申なり。此人々の語り給ふ事もけにや、いつれも有か
たき事ともなり。此本願したる稻多野の局みまかりし後、康元元年四月十
五日、金銅大仏の開眼供養を展のび（49）。導師ハ高野山の別当檢校理賢阿闍梨
（50）を請用しやうようせらるゝといへとも、彼山の寺務ハ一山の外に出る事あたハさ
る例により、則すなは恵智坊ゑちぼく（51）をつかハされ、開眼の導師つとめさしむ。此上
人、内にハ德行とくぎやうを専として外の行粧ぎやうせうを繕つくろひたまハねは、ミつから垢膩くじの衣
を着し、歩ちかよりして鎌倉に下りましくけり。人々あなとりかるしめけれ
は、將軍宗尊公、此躰ていにてハ大法の導師とすへき事いかゝあらんとて、別
に鶴か岡なる八幡の供僧くそう廿五箇院（52）を召して慶讚けいざんの導師を勤めさしむ。
恵智坊元來無我にして外ぎやうつせに行跡ぎやうせきを繕つくろひ給ハねハ、別に僧しやうを請しやうして導師とな

大仏の奇瑞により恵智坊をして導師を勤めしむ

大仏御頭のうつむくいはれ

しけるをも、はち(一)ち(二)よくとも思ひ侍らす。我ハ將軍の召るゝより參けるなり、大法の導師とても所望したるにあらす。ともかくも有へしとて、大仏堂のうしろなるかたに跪(一)り居(二)て念誦(ねんじゆ)などしたまひしに、御仏忽(い)うしろの方を見かへり給へは、人々奇異(きい)のおもひをなしそのかたを尋もとむるに、高野(や)の上人(一)す、つま(二)まり居給へるより外ハなし。されハこそかゝるたうと(ひじり)き聖(ひじり)とハしらて、おろそかにし奉りし事の勿躰(むつたい)なきとて、各うやまひたつとひ高座(こうざ)に請(しやう)し奉りければ、又本(もと)のことに御仏御くしを正面に向わせ給ひ、上人(一)を急(い)やくし給ふなり。今か世まで、うつむき給ふ御かたちハ則其しるへなり。扱開眼供養事終りて、將軍宗尊(しやうぞん)公(き)称異(い)し淨信を生しさせ給ひ、いかはかりの所願をもし給ひ、御望にまかせ侍らんとありければ、聖(ひじり)のいはく、我は浮世をのかれ侍る身なれば所願の事別に望なし。此仏の

宗尊親王惠智坊にその
護持（愛染明王像七軀
中の一軀を授く

愛智川の名称に関する
伝説

供養慶讃をつとめ申たるこそ我所願にてあるなり。宗尊公のいわく、さあ
るへき事に侍れとも、御房此間の御奇徳（徳）いさゝか信（信心）感するにあまり有。因
て大法会の導師勤られたる験（しるし）をまいらせん。聖のいはく、世の宝とてなに
かハあらん。しからハしかるべき仏像こそあらまほしけれと所望ありしか
ハ、將軍家年頃（ちよんじょう）鄭重し給ひし愛染明王七軀を出し、是いつれなりともま
いらすへしとありければ、則ありかたしとて五種相應の中王、愛染明王（尊）
尊申請奉り、ミつから背（うしろ）におひ奉り、又歩（から）よりして帰峰（きほう）ありしとかや。そ
の道の次てに近江の国を經給ふに、大河の流るゝありけり。その傍らに宿
し給ひしに、あるし聖を見奉り、誠の高野の聖にて渡らせ給ひなは、その
奇異なる効験（しるし）あらわし見せ給ふへしと、さんく（の）にのゝしりあへりけり。
聖のいわく、將軍のめして大仏開眼導師を勤侍る事鎌倉にかくれなく、何

のいつわりを申すへきにや。さあらハといひて、前に流るゝ大川にのそま
せ給ひ、愛染明王を持念し給へは、大河忽にさかさまになかれて、そのほ
とりの村里へうちあかり、おひたゝしくも汎濫せり。あるし五躰を地に
なけて悔あへりければ、聖又呪を誦して、本のことくになし給ひけり。
それより此川を恵智川⁽⁵³⁾と名つけ、今に愛智川と書きゑち川とよむよし
を愛染の愛と恵智の此理とそ。聖本山へ帰給し後に、將軍淨財を捨て七堂伽
藍を建立し、ならひに富貴莊⁽⁵⁴⁾千町の租をもつて山厨の供費にたまわる
とかや。此堂に安置し、朝懺暮悔の勤行懈たる事なし。誠に明王の靈驗
もあけてかそへかたし。蓮金院⁽⁵⁵⁾といふ勅額を給り、今すてに現然たり。
中にも彼山の僧食不足のおりからに、寺僧明王を持念し給へハ御口より白
米を吹出させ、彼山の僧膳に充けるとかや。其米長五分、今に彼山に伝持

恵智坊高野山に蓮金院
を建て靈仏を安置す

靈仏愛染明王像の由来
頼朝室平政子の秘仏

宗尊親王残る六躰を清
浄泉寺に奉納す

平政子夫請の愛染

愛染明王像に関する別
の伝説 行基の作

弘安七年忍性大仏の別
当に任せらる

忍性の活躍

し給る人あり。毎歳六月朔日、米吹の愛染明王(56)と申奉り開帳結縁するものなり。抑此の愛染明王の由来を尋に、本は北条家の秘蔵なり。しかるに頼朝卿の御台所に平の政子、北条遠江守平時政の娘所持し給ひしより、將軍家の御秘蔵となりたりしを、宗尊公の御時に高野山(57)え給わるものなり。残所の六躰の愛染明王ハ、此清浄泉寺に御奉納有。則愛染堂を建立ありて別して御信仰ありけるよし、則是平の政子夫請の愛染と申奉るハ此愛染明王の御事なり。尤行基菩薩の製作、別に七躰の縁起あり。弘安七甲申年、忍性菩薩(58)を請して大仏の別当に補任せらる。時に忍性世臘七拾歳、二階堂五大堂の別当職を兼帯し給ふものなり。同九年、忍性始て祈雨御教書を奉る。同拾年、又桑谷に病屋をかまへて、親疎を撰す病人を集させ、施行のために忍性毎日臨て療養を加へ、病人・饑人を悲愍し給へるものなり

東関紀行に見ゆる当時の大仏の規模景観の堂は十二楼の構へ北条時行の乱に名越勢大仏殿に立籠る棟木折れて五百余人死す

名越勢自ら大仏殿を壊ち庄死を装ひて脱出すとの説

(58)。是誠二、仏閣八関東第一の大殿、十二楼のかまへをなし、本尊に八東国たくひなき霊像、住僧は世にならひなき忍性にておわしますにや。されハ源の親行⁽⁵⁹⁾の東関記行⁽⁶⁰⁾にも、由比浦に阿ミ陀の大仏を作り奉る。烏瑟^{ひつ}たかくあらはれて半天^{はんてん}の雲に入、白毫^{びやくごう}あらたにミかきて満月の光を輝かす。堂八十二楼のかまへ、まことにひろしとハのへられたり。然るに建武のころおいにいたりて、相模二郎時行蜂起^{ほうき}(61)して名越式部太夫^{なごえしきぶたふ}か勢、大風を遁れんとて大仏殿に逃籠^{にげこも}りける所に、棟木微塵^{むなぎみじん}におれて、其内に集り居たる軍兵^{ぐんびやう}とも五百余人、耆人も残らず押にうたれて死けるとなり。又里俗のいはく、式部太夫か加勢、大風を遁れんとて大仏殿に逃籠^{にげこも}りけるかな、幸ひにして軍の智謀^{いくさ}に大仏殿を打やふり、皆々死ける風情^{ふぜい}にてもなし、大仏の後山^{うしろやま}より常盤^{とこまわ}の郷^{さと}え忍ひ越へにして、耆人も死したるものな

応安二年大風のため再び大仏殿顛倒す

建長寺大素大仏殿を再建す

大素は大仏の中興開山明応四年八月大地震及び津波のため大仏殿の仏閣僧房悉く流失す

大仏殿の以上四度の災害はいづれも風神の崇りによる

道士大仏の像を相し定印に相違ありといふ

風指印外に出づ

しといへり。其後応安二年己酉九月三日に、亦大風大仏殿を顛倒せり⁽⁶²⁾。

此時建長寺の大素和尚⁽⁶³⁾、大仏殿を再建し給へり。因て大素禪師を大仏の

中興開山と申侍るなり。明応四年乙卯八月十五日、人王百四代後御門の御宇、將軍尊氏十一代義澄の御時。

東国大地震⁽⁶⁴⁾にて由比の浦浪激揚して大仏内の堂・二王門・三門・十二

楼等の仏閣僧房ごとく流うせて、地境おのつから河原となれり。かく

のこたく大仏殿四度の盛衰ハ、或ハ水災、或ハ風災によれり。諸人これを

申伝へて、風神の遺恨あるゆへに、やゝもするハ大仏殿を吹き破るといへ

り。又一時道人⁽⁶⁵⁾大仏堂に入て旅宿す。風神の遺恨にて此大仏殿毎年秋風吹

破るとて、種々に方便して是を防といへとも、さらに止事なしと諸人の

恠⁽⁶⁶⁾ことを聞けり。因て思惟⁽⁶⁷⁾して尊像⁽⁶⁸⁾を試見るに、本尊の定印⁽⁶⁹⁾果して相違

あり。風指⁽⁷⁰⁾聳て印外に出す⁽⁷¹⁾。了悟⁽⁷²⁾して衆につけて白さく、年来の風災、

印象の違へるは密教の奥旨による

龍神大仏の面容を見んとして軒を吹き破るなりとの伝説

明応の罹災より荒廢のまゝ、二百余年を経て未だ修覆せられず

恐らくハこれより起れりといふ。又真言宗の旅僧、此印象の違へるを見て甚讚嘆して、如是の大像を鑄奉る人なれば、密経の奥旨、無量寿仏の別徳を顕すものなりと、世にたくひなき靈像と讚ひすといへり。然る時は、風災の事も皆是時節到来なるへし。又或時住持の僧の夢想に、老僧三人来り告ていはく、此堂の軒を毎年吹破る事、別に疑ふ事なかれ。龍神此御仏の面容譴礼せむかために、御堂の軒を吹き破るなりと夢見るよし、申伝なり。されハ水風の災障といふも皆御仏の御方便、海中の衆生まで利益し給ふためなるへし。さらにほん見の及さる事なり。但し惣して有為の世の轉變ハ今さら初めたるにあらず。世移物換市朝変遷する事ハ、三国とも同し。今かまくらも、うつり行うつり替りて、おのつから件の道場もまた誰ありて修營をかふるものもなく、はらハぬ庭の石すへのミ残にしかハ、今ハ

本尊にも浜松かえの（松）手向さへ絶はて、、既二百余年の久しきを経たり。か
なしきかや、紫磨金山の尊容も、むなしく（鳩）鴿雀の宿りとなり、鎮護国家の
霊場も、さしなから（狐）狐兔の住家となる。されとも天運めぐりつ、、（ゆ）ゆるて
ハかへる理にや。

(外題)
「上 鎌倉大仏縁起 下」

相模国鎌倉大仏縁起卷下

祐天、古寺靈仏巡拝の
ついで鎌倉大仏に詣で
その荒廢甚だしきを慨
く

近頃祐天大僧正⁽⁶⁶⁾、初世縁を蔑棄して下総国牛嶋に隱遁し給ふ砌に、
飄然たる一鉢、湖海に雲游し、白足の躡所此勝境に涉。古寺靈仏を順拝
するに、彼五山十刹⁽⁶⁷⁾のときハ見つむへき靈跡なり。独り斯寺ひとた
ひすたれての後、又有力のもの匡復をなす事なし。しかうして殿朽堂壞、
門倒、廊仆、四方の境おほくハ村氓のために侵奪せられたり。此零落を
睹給ひて、たちまち祐天大僧正、外にハ色を變、内にハ慨然たり。さしも
金銅の大像も、そのらの分穿裂して、悲へきにたへたり。師則伴僧と物語

していはく、夫我朝に大仏を造立し給ふ事ハ、人王四拾五代の帝聖武天皇の勸願、御后光明皇后の勸発に起て、今ハ奈良・鎌倉・京、是を日本三大仏⁽⁶⁸⁾と申なり。此三所の大仏の中におゐて、此尊像ハ御相好円満にして殊勝なる事、極て最第一なり。恐らくハ凡作ならず。天竺・震旦にもかくのとき微妙円満なる製作ハよも類ひあるへからず。むかし源親行も此大仏⁽⁶⁹⁾にもふて来て讚美していわく、此大仏の製作、末代にとりてハふしきといひつへし、仏法東漸のみきりにあたりて、権現、力をくハふるかと有かたくおほゆとのへられしも、実やおもひやられて候なりと申給ぬ。大仏の尊顔を瞻仰して更に厭足し給ハす。一夜一日かその内、大仏前の草間に安坐唱名しておわします。又伴僧と夜もすから物語しき。此三国第一の御仏に、誰ありて香花の供養するものもなけれハ、御利益もおのつからこ

祐天、他日寺坊を建立せんことを發願す

祐天増上寺に董す

れなきに似たりと、歎息浅からず。涙にむせひ給ひ、其時心中に發願してのたまわく、我力をえたらん時に、必ず寺房を建立して永く香華供養し奉るへしと深く誓ひを立て、暁天あけぼのに尊容そんごうを稽首けいしゆして、仏前を退給ひぬ。その後台命たいめいによつて元禄十二卯仲春、生実おゆみに出世し給ふ。同十三年辰孟秋、飯沼いらいぬまに擢ぬきらる。宝永元年申年冬、小石川こいしがわに転移し、正徳元年卯臘月、縁山えんざんの席たを董す。即日大僧正に任らるゝ。時に世臘せろく七拾五歳なり。一時大僧正御法談の砌に、帰依の道俗に對してのたまわく、我れ隱遁の身なりしおりから、鎌倉の大仏に參詣せり。今我朝に大仏と申奉るハ、奈良・鎌倉・京都に有り。しかるに奈良・京都ハ御堂・伽藍を構て莊嚴具足し、供物円満せり。鎌倉の大仏のミ諸堂破壊はえして莊嚴・供物を奉るものもなし(74)。あわれなる哉、雨露にうたれ、つゐにハ退轉し給ふへきものなり。此

以前の発願を果さん
とを図る

將軍綱吉の女鶴姫これ
に感じて合力を誓ふ

鶴姫他界す
祐天これを嘆く

鎌倉の大仏ハ関東の惣護国寺として、むかし東国の高き賤しきをすゝめて、源家武運・万民長久祈願のために建立ありしとかや。今は吾妻の繁栄ハ帝都に過たる。是も此御仏の守護力に依るとかや（小脱カ）いつへし。然るに貴賤男女の参詣すへき道さへ絶て、草深くあれたること言葉にもものへかたしとて、涙をおしぬくひながら、いとねんころにぞ、隠遁のむかしみつから発願し給ふ事を物語していわく、只はやく我が命の有程に参詣の道を開き、現当の祈願せらるゝために、寺房（じぼう）建立の宿願を希（こいねが）ものなりし。時に事の序（ついで）やありて此御物語り、かたしけなくも鶴姫君（75）の御聞（ごぶん）に達して、ありかたも御感涙にて、とうとき御房の御願かな、我その時をゑたらハ、上人と力をあわせ建立いたしまいらんと、いと（せ脱カ）もあつく御信願有しかとも、未建立の時いたらす、姫君終（つひ）に御かくれさせ給ぬ。祐天大僧正、此鶴姫君の御

元禄十六年冬の大地震
に大仏の台座崩る

祐天、將軍家宣の子家
千代君及び大五郎君の
早世により、その香奠
の一部を大仏台座の修
理費に宛て、冥福に資
す
尊像の亀裂を銅板にて
覆ひ鳥類の腹中に入る
を防ぐ

祐天なほ僧坊を建立し
得ざることを嘆く

江戸浅草の人野鳥泰
祐、その妻浄泉院の勸
めにより祐天に寺坊建
立の費用寄進を申し出
づ

信願を伝え聞給て、我か素願の成就なき事を御なけき、姫君の世になき事
を悔にあえり給ふ御涙かきりなし。譬へハ渡りに幸の便風を得て船をうし
なひたるかことし。剩元禄十六年の冬東国大地震⁽⁷⁶⁾にて、大仏の石座崩
さかり、大仏の尊像すてに危ならせ給えり。大僧正のなけきかきりなし。

止事を急すして小石川伝通教院に御任職の砌、家千代君⁽⁷⁷⁾・大五郎君⁽⁷⁸⁾
の御賻銀若干料をもつて、御冥福のために大仏の石座御修覆⁽⁷⁹⁾并尊像穿
裂の所に銅板をもつて覆をなし、鳥類腹内に入る事をふせき給ふ。件のこ
とく仏像石座修補なされたりといへとも、いまた住僧安居の僧房建立し給
ふへき御宿願未ミちす。香花法味の供養なき事をなけき給ふの所に、幸哉、
爰に大僧正白衣の弟子に、武江浅草の住野嶋新左衛門尉泰祐⁽⁸⁰⁾といふ一
善士あり。大僧正三縁山増上寺住職の砌、妻の浄泉院⁽⁸¹⁾、泰祐に勸てい

祐天これに歎喜す

わく、我師祐天大僧正は鎌倉の大仏如来を御信仰浅からず、善士もまた年来の信仰、師にvari給ハさる事なれば、ねかわくハ、黄金幾許両をもつて大僧正の御宿願、并善士の兼望のごとく、大仏如来の御香料に合力して、不断念仏の御道場⁽⁸⁾を建立し給さるや。泰祐是を深く信感して、我常にかまくら大仏え香花供養なき事をなけかハしく思ふといへとも、いまたその志発さりき。我妻にあらすんは、なむすれそかくのこくの大善事を勸給んやと。たちまち縁山に詣て件の事を大僧正に申。大僧正怡然として起座し、巍然として席を端し、泰祐に告ていわく、我是を願ふ事年久し。已願あつて未其資糧なく、空年月をへたり。今泰祐喜施の志をおこして、我所願と同く再び鎌倉の大仏を建立せむと願ふ。我願も今忽に満足したりと。然りといへとも、我今老衰に及へり。又台命によつて住職の身なれば、

祐天、光明寺松譽詮察
にこれを伝ふ

大仏清浄泉寺は光明寺
の末寺長谷寺の持分

我身を我心にまかせず。ねかわくハ我に替つて、我所願のこたく大仏前に
一字を建立し、常念仏を始て香花・珍膳を捧、梵唄・歌讚の法味を供養し
給ふへし。爾時泰祐ハ師の仰を蒙り双眼に歓喜の涙をなかし、師の慈愛に
て我れ過分の大善根をなす。夫往生極楽の教行にハ称名念仏にて事足たり
といへとも、廢れたる仏閣を建立せすんハ、又住持・三宝の供養を斷、仏
法の興隆如何せん。ありかたき師の教示を蒙り奉ると、稽首作礼して師の
御まへを退出せり。しかうして後祐天大僧正ハ、光明寺松譽詮察上人⁽⁸³⁾
の方へ大仏の事を御尋ありけり。詮察上人ハ躍然として随喜したまひ、増
上寺にいたりて大僧正え訴えていわく、此大仏ハ我山の末寺長谷寺⁽⁸⁴⁾の
持分なり。自山末寺にてハ是あらず。此ゆえに長谷寺を縁山に召され、爰
に野嶋氏何某と云ふ施主ありて大仏の宝前におゐて常念仏を起立せんとほ

祐天、長谷寺住持を増上寺に召し、大仏清浄泉寺を光明寺の末寺となすことを達す

代官所に触れて村民を増上寺に召出し、田畑を買上げて境内を古への広さに復す

境内復旧し寺坊輪奐成る

仏画の製作

つす。よつて大仏清浄泉寺、本山光明寺の寺務⁽⁸⁵⁾に相定へく旨仰渡さるゝ。これによつて、長谷寺并二光明寺より官に達して、天照山の寺務に相定。しかうして当時の代官所へ申て支配の村民を縁山に召寄せられ、此寺の境内、古への大仏殿礎へ際まで村氓の田畑と成しを、則泰祐喜施の浄財をもつて佃の高下を論せず、金銀・米穀村氓の望にまかせて、古への寺境若干地を買求得て⁽⁸⁶⁾、山を崩し谷を埋めて平地と作、松を植、竹栽てハ忽林となる。井を堀ては清水を湛へ、池を堀てハ清蓮を種、忽に靈跡・勝地となつて、誠に千歳をも経かとうたかわる。其所におみて所願の通不断念仏の道場を創建し、其道場の莊嚴彩色にハ金銀五色の泥をもつてし、図画にハ世尊釈迦牟尼仏、耆闍崛山中に在々て、韋提希大夫人の致請によつて、今時末法五濁の悪世、下根愚癡の衆生をすくわんために、阿弥陀仏無

恵心増都作の弥陀の木像を本尊として常念仏堂の中央に安置す

宝祚延長鎮護国家の祈禱

家康以下歴代將軍及び家千代君・大五郎君の位牌を安置す

善導大師・円光大師の影像を懸く
中興開山祐天及び野島泰祐夫妻の肖像寿牌安置

縁の慈悲本發深重誓願の口称念仏、五乗齋入の大願、他力浄土の秘術を

演説し給ふ躰相を顕ハし、靈木瑞草・奇石清池・山林諸鳥・四季百花・楼

台門閣薨をたゝし、筆を尽して画きたり。中央にハ恵心僧都の御母報

恩のために、一夏九旬、一刀三礼の製作阿ミた仏の尊像を安置して、

常念仏堂の本尊に仰奉り、今上皇帝宝祚延長、天下御安全億々万々歳、御

武運長久・鎮護国家の祈禱ならひに東照大権現を始め奉り、御代々の尊儀

仏果御菩提を祈奉るの尊牌、家千代君・大五郎君の御位牌を建、左右に祖

師安置の壇を構えて、半金色の善導大師、我朝念仏の元祖円光大師の

の影像を安置し、又左右に内陣を構、左にハ中興開山祐天大僧正の影像・

寿牌を安置し、右にハ野嶋氏一家の位牌ならひに泰祐夫婦の自影・寿牌を

安置し、其外日牌・月牌、檀越の位牌・過去帳、法界万靈の位牌まで造立

莊嚴器物善美を尽し悉く周備す

祐天、泰祐の作善を讃へ、その法名高德院を以て本寺の院号となす

して、寺院道場に有へき所にまかせ、長修念仏珍膳香花、供養の器物、僧蓋・幢幡・簾幕等、一切什器、仏具・世具・衣服・臥具・飯食・野菜、諸有品を集め調え、凡黄金若干をもつて、善尽美尽、師の所願のこたく、則泰祐建立せしむる所其功莫大なりといつへし。祐天大僧正ハ歎喜踊躍し、我宿願今泰祐かちからによつて皆令満足す。善哉く、泰祐ハ是真の大善根を作ものなりと讃嘆褒美して、高德院(91)といへる泰祐の法名をもつて此寺の院号になされ、常念仏の道場に則高德院とゆふ額を打たせられたり。時に泰祐、此道場におゐて不断念仏を興行せんとほつす。希我師大僧正、長修念仏を開白し、末代に弘通し給へと謹て願ふ。祐天大僧正ハ歎喜な、めならずして泰祐を讃歎していわく、夫大なる哉、常念仏興立の功德は廣大無辺なり。我今開白して善士か願意を満足せん。爾時泰祐、増上寺

泰祐の報謝により増上寺に於て宗門の長老以下衆僧多数を請用して大供養会を修す

祐天、慶讚の偈頌を誦し常念仏を開白す

大方丈御仏殿におゐて、光明寺詮察上人・江戸四箇の檀林⁽⁹²⁾・縁山一文
字席⁽⁹³⁾五十人の長老并寺家三十坊⁽⁹⁴⁾等の衆僧を請用し、野嶋一家の一族、
泰祐夫婦を始めとして子息々女、老若男女の一門眷属誘引して道場に集会
し、師足⁽⁹⁵⁾を礼す。諸果珍味、野菜香油の美味、集めて三宝に供養し、大衆
に布施し奉る。時に大導師顕誉祐天大僧正ハ高座に登り給ふ。慶讚の大衆
も法要の席付く。良数刻⁽⁹⁶⁾の法事おわつて、行者長周御⁽⁹⁷⁾しよもくを大僧正⁽⁹⁸⁾え
奉る。祐天大僧正は御しよもく取られ、大音にて誦⁽⁹⁹⁾していわく、南無十方
三世⁽¹⁰⁰⁾尽虚空、遍法界⁽¹⁰¹⁾微塵刹土中、一切三宝降臨道場、哀愍⁽¹⁰²⁾納受し給へ。施
主泰祐長時不退の淨業を興業せんとほつす。六通をもつて照知し給え。請
願わくハ、天長地久国土安穩、仏法増隆施主一族二世安樂、如我昔⁽¹⁰³⁾所願
今者⁽¹⁰⁴⁾已満足と唱え、光明遍照の御偈頌⁽¹⁰⁵⁾をもつて随喜の御感涙なから、常念

松譽詮察に嗣法の嗣書を授く

正徳二年三月詮察鎌倉大仏の入仏供養を修す

仏開白し、御しよもくを本山光明寺五十二代松譽詮察上人に授与なされ、詮察上人、祐天大僧正の御しよもくを相続て、正徳二年壬辰三月十五日、鎌倉におゐて入仏供養の導師を執行、大僧正祐天の御開白の念仏を本堂に写す。入仏堂供養の法要次第ハ、長谷寺慈照院(95)より本尊・二祖の影像、大僧正并泰祐夫婦の自影、導師詮察上人まで輿にて幡蓋をかさり行列をたゝし、本山の末寺不殘慶讚の僧衆たり。法事の外護、かためとして御代官小林又左衛門(96)殿役人何某なり。誠に貴賤男女参詣群集して感涙をもよふさすといふ事なし。則大僧正祐天の影像を安置して高德院中興開山と仰き奉り、詮察上人を第二世に請し畢ぬ。しかしよりこのかたハ、称名の声大空に震ひ、香花供養怠たる事なかりしに、まことに世の善事にハ必ず障碍あり。世間の諺にも寸善尺魔といふ事あり。経説にも、大善人

野島泰祐遠島の罪に遭ふ

高德院の常念仏退転せんとす

光明寺演蒼白隨の苦辛

祐天・詮察それぞれ念仏の資若干を寄附す

には転重軽受とて種々の災難に逢ふ事を、如来の金言・祖師の書籍にも
顕れたり。業報ハ譬ハ他人財宝借て、又終にハ本へかえすへきかことく、
宿業あれハかならずつくのふ。これによつて善事を作人、未来ハ必ず地
獄にも落へき所の重き罪を転して、此娑婆にて軽く受るを転重軽受と申な
り。野嶋氏も転重軽受の道理にてや、其後遠嶋の罪⁽⁹⁷⁾に逢えり。野嶋氏
既に大善根をなしたる人なれハ、如来の正方便力にて、重き罪を此現在に
て軽く受て、宿罪をつくのふ事なるへし。これによつて、野嶋氏在嶋の内
に常念仏の助成なく、珍膳香花の供養已に退転に及はんとしたり。此時本
山演蒼白隨意上人⁽⁹⁸⁾、野嶋氏遠流の罪に逢てよりこのかた、常念仏相続
の資糧なき事を深く悲歎し給ひ、増上寺松蒼詮察大僧正に訴、詮察大僧正
此事を前大僧正祐天閑居に申て、師の開白し給ふ長修念仏相続の事を願ひ

松平忠国室光寿院及び
内藤義孝室光安院の寄
進

享保六年三月泰祐赦免
せられて江戸に帰る

財産没収せられ赤貧の
身となる
妻浄泉院及び息女共に
他界す

給ふ。祐天閑居ハまた止事やむことをゑすして、念仏の資糧そごばく若干金をもつて寄附せられ、且又松平伊賀守御室光寿院(99)を御勧め給ひて、黄金若干の寄附あり。同増上寺詮察大僧正并内藤能登守御室光安院(100)、黄金各々御助力して、不断念仏料御寄進有。右御助力の丹精によつて、常念仏香花供養おこたる事なし。時に享保六年辛丑かのとし三月、野嶋氏赦免の奉書を蒙りて帰国し、故もとのことく御歴々の憐あはれを深く、万事むかしに替る事なしといへども、諸もろもろの財宝罪のために皆闕けつ所せられて、奴婢ぬひ僕中はやくちゆうの養へき便たよりなく、赤貧の身と成、余命の渡世とせ更乏あまつさんし。剩世あまつさんの便りになせし妻おくに後れ、又壻人の息女あり、父母に孝養あつく、天性と慈悲憐愍れんみんの志さし深く、ゆへに諸人に愛敬せられ、一族の親愛睦しき事世たぐいに類なし。しかるに父の泰祐罪に逢ふて遠嶋に在しを嘆悲なげミ、是を病のもと、して終つひにむなしくなりぬ。其後に

泰祐、光明寺の学誉
鑑に剃髮してその門に
入らんと請ふ

泰祐、配流中島民に念
仏を奨めて教化す

泰祐鎌倉に詣来て、本山光明寺学誉上人(四)に申ていわく、我祐天大僧正の御化導けどうにあつかり奉り、優婆塞うはそくと成し故に、在嶋の間も、仏とも法とも知らざる無智の嶋人をお多ふく教化し、殊更たいま当麻中將姫の曼陀羅淨土まんだらの変相を持参して、極楽世界微妙快樂みみょうけらくの躰相をおかませ、弥陀尊の深重誓願、釈迦尊の大悲本懐たる所の御念仏をすゝめて、御慈悲の御本願を弘通して念仏の弟子をあまた教化したる事、師の化導より過たり。遠流おんるの罪に逢ふ事ハ不幸なれとも、此たうとき浄土の法門をひろめし事、釈迦・弥陀二尊の本意、六方諸仏の御心にも叶ひ、元祖法然上人(四)も悦び給ふへし。これらの功德くどくにてや、今又罪をゆるされて本国に帰事、是偏ひとへにありかたき事ともなり。諸もろもろの財宝ハ罪のためにほろびたれとも、我師祐天教示きょうじして、此の高徳院を建立いたせしのミ我が悦よろこひなり。罪を免ゆるされて本国に帰る事ハ、

学誉、泰祐を諫め在俗
のま、家業を興し高德
蓮社の尽力せんことを
勸む

いさ、か幸なれとも、此外に更に悦へき事なし。哀願はくハ、上人我鬚髮
を剃除して、一鉢三衣の与え給ひ、是よりして高德蓮社(103)の結衆に入、
不断念仏し、仰てハ天下和順を祈、伏ては臨終正念・往生極楽の教行を
修へし。学誉上人ハ共に涙衣をうるほして、泰祐に教示していわく、重罪
に逢、便りとせし妻にわかれ、頼母子となりし愛子をうしなひ、自も衰老
の身となり、世のましわりもあしきなく、万事につけてものうきまゝに、
剃髮染衣の望、尤理成かなとおもへハ、愚老もいと、涙忍かたし。しか
しなから、剃髮の事ハまつく止給ふへし。夫往生極楽の事ハ、師の御相
伝に極められ、三国仏祖相乘異途なく、安心決定の上、毎日念死念仏の用
心堅固にして、淨業の正因、口称の一行懈怠なき事を侍らへは、極楽往生
の事ハ少も疑ふへきにあらず。またあまたの金錢を抛て仏閣を建立し、

所々の仏像・神社の修理、もろ／＼の善事に助力して、財宝さらに恪事なし。此功德また無尽ならむ。いかんそそれ、仏捨めや。只願わくハ、高德蓮社の長修念仏料、善士罪に逢ふて家財と共に闕所せられたり。其後祐天大僧正を始奉り、歴々施主方あつて、黄金若干をもつて寄附し、常念仏の資助に充給ふといへとも、この頃世の中の変によつて蓮社の修理も叶わす、不断念仏の資糧も乏しくなりぬ。衰老の身に及、ちか頃辛勞の事にあれとも、むかしのことく世家業(世脱カ)をつとめられ、其助成をもつて今一度修理し、常念仏の資糧を差加えて、乏からざるやうに建立し給ふへし。剃髮染衣し如何(いかん)そ此事を叶ひんや。泰祐ハ觀喜斜(くわんき)ならず、嗚呼(あ)尤なるかなと、ねふりのさめたることくにして、剃髮染衣の望を止め。それより武江浅草(ぶかうせんそう)に帰、在家の業(な)を作、老の身を厭わす、高德蓮社長修念仏、師の祐天(かいびてん)開白せられ

養国、泰祐と父子の縁を結ぶ

享保十八年三月泰祐、光明寺真察に請うて養国を住持となす

養国の師は謠誉円竜

し功むなしうせましと、あけくれ此事を經營いとなむ。嗚呼あゝそれ、數百年來殿堂も門庇もんびもなく、雨露の海風のおかし奉りけれハ、さしもの金銅もや、うすろきつ、御身ごみハいまた多おほの穴をうかちたり。心あるものむしろこれをいたまさらんや。予此時に当り、野嶋泰祐と親子の好身よしみを結し因縁よりして、泰祐自鎌倉に来て、本山現住真察大和尚おにに予か住職の事を願ふ。時に享保十八癸丑みづのとうしの年春三月、住職じゆくの義ぎを蒙りぬ。今中興開山祐天大僧正ハ我師のためにハ、一室の師弟よりも親しミあつく、面上に附法し、又大僧正三縁山住職のみきり、我師をもつて一山の知事の職分に補任おほにんせられ、しかしりより松譽詮察大僧正・演譽大僧正、以上増上寺三代九年の間勤役して後、台命によつて岩附仏眼山淨国寺じやうこくじに住職す。誠蓮社謠誉上人ふに不虛ふこ円龍大和尚おんといふ。是我剃度ていど一室の師なり。此高德蓮社の長修念仏の

事も、我師諦譽、増上寺勤役のおりからより心底にと、めて、相統の資助を經當り。且また宗門の鼻目關東第一の大仏に御堂なく、雨露にうたれ、漸々零落に及ぶ事を常に悲嘆せり。然るに愚僧いかなる宿縁にや、たまゝ此の寺に住持してより、いたく此事をなげきて、つかの間もわすれず。熟むかしの伽藍跡を見れハ、見るに忍かたし。今更我が師円龍悲嘆せし事をおもへは、しきりに胸にせまる。大仏殿破壊して二百余年の星霜を經ぬれば、金銅の製作なりといへとも、白毫肉髻をはしめ奉り所々零落におよび、往昔の大殿ハ今礎のミ残りて、むなしくも土中に埋れてあれハ、中々にも住侶の身と成歎へきにたえたり。いかにもして尊像の破壊を補、大殿もむかしのことくに修造せむとあけくれ願ひけるに、沙門の清貧自力の及はざる事、年を積とも此願果すに時なし。然るに此度かたしけなくも

養国、大仏殿修理のため幕府の許可を得てその資を江戸及び関東の上民に勧進す

鎌倉大仏は女人と不思議の因縁あり桶多野局

官を御許容⁽¹⁰⁸⁾を蒙りて、まつ東都の貴賤男女を勧進し奉るものなり。尤吾妻の惣氏寺、現当二世の祈願所、子孫繁昌の為建立成^なおかれたる御仏なり。其子孫ハ吾妻の貴賤男女に当れり。是全く外の御仏にはあらず、東国男女の先祖建立の仏なり。嗚呼夫、志しあらん人ハ詣来て供養渴仰あるへきゆわれなり。重苦^{じゆうく}撰取^{せんしゆ}の願王冥蹟^{がんおうみやうけん}の御利益^{りやく}、何そ二世唐損^{とうそん}ならんや。然るに我朝三大仏の中にも吾山の太夫ハ、頼朝卿の局桶多野の志願にて、鶴岡八幡宮の御本地通肩衣定印⁽¹⁰⁹⁾の阿ミた仏なり。此外にあミたの大仏は是なし。不思議なる哉、むかし世尊釈迦牟尼仏も弥陀の因願果上を説て、未来世の凡夫現生護念・後生浄土の両益^{りやうやく}をあかし給ふ時も、韋提希夫人⁽¹¹⁰⁾として頻婆娑羅大王の御后、女子をもつて發起として演説し給ひ、我朝にてハ中将姫のために、浄土の曼陀羅^{まんだら}を顕ハし給へり。今此の寺ハ人王^{じんおう}四十五

將軍家宣の薨後、側室月光院、祐天に頼り剃髮しその剪髮及び櫛笄等を大仏の胎内に奉納す

家宣の正室天英院祐天に帰依し浄土宗に改宗す

天英院もその剪髮を大仏に奉納す

綱吉の側室瑞春院・同寿光院、家宣の側室法心院・同蓮浄院等も奉納諸人これに倣ひ剪髮遺骨位牌等を奉納する者多し

代の帝聖武皇帝の御后光明皇后の勸免かんげんにて創建し、大仏尊像ハ頼朝卿の局

稲多野の發起はつきより成る。近頃祐天大僧正の御化導によつて、かたしけなく

も大樹家宣公の一回御忌たいじゆ 正徳三年たいてい癸巳十月に相当し、同年九月十五日月光院三位

大樹家継公だいじゆ 祐天の徳を慕ひ、迎て戒師として、師に法衣を乞みすかち、親これを御美母

着し、落飾おとしやくの式ありて後、御つみ髪并蔦つたの葉雁かきがねの蒔絵有る御指櫛・御笄みすかち

此大仏の御腹内に御奉納あり。同正徳三年巳十月廿日、天英院一位(112)

大樹家宣公御本室。祐天の徳御聞席を近して師の説法勸化を聴聞し、忽に宗を改

めて浄土の門に入り給ふの後、御つみ髪の御髮をして大仏の御腹内に奉納

有。其外御歴々瑞春院(113)・養仙院(114)・法心院(115)・蓮乗院(116)・寿光院(117)、

右の御方々の御つみ髪も残らす野村の御方(118)より御添ふみにて、祐天大

僧正より御奉納、億々万々年の御祈祷相勤へきよしあり。諸人は是を伝ひ

綱吉の母桂昌院
綱吉の女鶴姫

泰祐の妻浄泉院

江戸三十間堀の内海吉
兵衛祖母妙珠、夢想を
感じて大仏の白毫相を
再興す

罪障重き女人を救済せ
んとの弥陀の誓願

き、あるひハ髪をつミ染衣して其髪を納め、或は父母の白骨・妻子の位牌を納めて供養料を我山に寄附するもの、ま、おほし。誠にこれ、善縁の誘引といつへし。⁽¹⁰⁾又大母桂昌院殿⁽¹¹⁾并鶴姫君の御所ハ、大仏殿再興の御志願ありしより、今の常念仏堂建立の発起も、元來泰祐の妻浄泉院にあり。茲歳又、官にうつたへて大仏尊像を修造せむとすれば、武蔵国江戸三十間堀⁽¹²⁾の住人内海吉兵衛祖母妙珠法女、大仏を夢中に拝して、白銀をもつて大仏の白毫相を再興す。是いかなる因縁にてや、此御仏建立の発願主も皆女子にある事、不思議の事にや覚ゆれ。夫阿ミた仏ハ重苦の衆生を助給ふの御本願なり。其中にも女身ハさわりおもく、つミふかくければ、弥陀ひとり三十五の本願、女人往生の誓を立給へり。是を転女成男の願とも申なり。諸仏菩薩ハ皆衆生をあわれミ給ふ事、猶々父母の赤子をあわれ

大仏建造が女人の發起
に出づる理由

むかことしといへとも、中にも弥陀尊の御誓願ハ諸仏に越、重苦の衆生を
あわれミ助け給ふ事ハ、別して父母の重病の子をあわれミ悲むかことし。
此娑婆世界の人民ハ、あみた仏と不思議の因縁あつて、我等衆生の為の本
発誓願なり。よつて此界の衆生、弥陀の本願によらすんハ諸仏菩薩つも撰
取して尽すへからず。此重苦の衆生の中にも、女人ハさわりおもけれハ、
弥陀の名願力に因すんハ、千劫万劫恒河沙等の劫にも終に女身を転する事
をうへからすとハ、唐の善導大師の判尺なり。かくのことく諸仏ほさつの
手にもれし重苦の女人をふりす、いて、三十五の御本願にハ、あまねく一
切の女人をすくわんとの御誓願なり。此等の謂れるにや、あみたの法門を
ハ顕す砌にハ、三国ともに多く發起ハ女子あり。是皆仏の方便力にて、下
根愚癡の女人こときの衆生をも、もらさすすくへ給ふ大悲の御本願を顕わ

鎌倉大仏は弥陀通肩衣の尊像

御頭のうつむける理由

生身の御仏

享保二十年正月野島泰祐の所望により養国この縁起を撰す

さんために、女子に發起を成さしめ給ふかや。後世の志しあらん人ハ、此事を能々信感して、無上菩提の信心を發して、早あみた仏に帰命し給ふへし。既に吾山の大仏ハ大悲撰取の主、通肩衣のあみた仏の尊像なり。此無量寿如来の大像ハ、むかし高野山の恵智坊持念し給ふに、御頭を後へ見かへり、正面より礼拝し給へは、前にうつむき給ふ。近頃妙珠尼か夢中に毫光をはなつて照さる、事、生身の御仏とやいつへし。あに是を凡作とやいわん。時に享保廿年乙卯春正月、如意珠日、野嶋泰祐の所望によつて、養国謹て識すものなり。

〔補注〕

(1) 深沢は、鎌倉の北西部にある常磐・津村・州崎などを含む地域をさすが、『鎌倉大仏縁起』(以下『縁起』と略記)のように「相州鎌倉深沢の里」と呼ぶ場合は、『吾妻鏡』にみえる大仏の勧進聖浄光の企てを念頭において記述された特別の表現かと見られる。例えば、同書嘉禎四(一二三八)年三月二十三日条には「相模国深沢里大仏堂事始也」と記し、同年五月十八日条の大仏の御頭が挙げられた際も同様の表現となっている。当時の大仏は木造で、完成後の大仏の所在は「深沢大仏殿」(吾妻鏡、仁治二年三月二十七日条)、完成時の供養に際しては「深沢村建立一字精舎」と表記されている(吾妻鏡、寛元元年六月十六日条)。当初の木造大仏は、建長四(一二五二)年八月十七日に金銅像の鑄造が開始されるが、開始の際は「深沢里」と記される。

(2) 仏教の世界観による説で、インドの中央に聳える須弥山の南方にあるとされる国で、南閩浮州ともいう。後には、人間世界、さらには現世の意味にもなった。

(3) 奈良時代、聖武天皇は流行病や飢饉そして辺境の不穏な状況に苦しむ国情から脱皮することを目的に、国ごとに僧寺の国分寺と尼寺の国分尼寺の二寺の建立を命じた。相模国の場合は、海老名市国分に建立された。仏教によって国家の維持をはかる鎮護国家の理念を全国に及ぼすものであった。国ごとの国分寺の頂点に位置づけられたのが東大寺で「総国分寺」とも呼ばれた。『縁起』の「東の惣国分寺」の表現は、鎌倉大仏の所在する場が東国をまとめる惣国分寺の所在地であったということを強調したものである。虚構ではあるが、鎌倉幕府における大仏造立の意義を天平の時代にさかのぼらせて叙述

したものである。

(4) 平安時代初期の『上宮聖徳太子伝補闕記』や『聖徳太子伝暦』に聖徳太子が救世観音の化身ということが説かれ、聖徳太子と同じ丈とされる法隆寺夢殿の本尊が救世観音と称されるが、「救世観音」は『法華経』『普門品』中の「観音妙智力、能救世間苦」なる句から起こったものとされる（内藤一郎「夢殿秘仏と中宮寺本尊」『東洋美術』四〇八 昭和五〇六年）。聖徳太子を聖武天皇に置き換えたことは、『東大寺要録』（巻第二、縁起章第二）の「私云、彼聖徳太子者、救世観音変身、思禪師念比丘之後身也、聖武天皇者、聖徳太子之後身、救世観音之垂迹也」によっている。

(5) 実在の人物ではなく、伝説上の人物。『大山寺縁起』に、東大寺建立に尽力した良弁を相模に迎えた際の人物とされる。甘縄神明社の別当寺甘縄院の開基とも伝える（『新編相模国風土記稿』）。

(6) 『東大寺要録』（巻一、本願章第一）の「孝謙天皇（中略）大僧正行基菩薩於生馬山入滅、生年八十、弟子三千一百九人、大僧正者、百済智鳳之弟子也、是文殊之化身也」によっている。

(7) 「三艘」は横浜市六浦方面の地名。『新編武蔵風土記稿』には「往古唐船三艘来舶せるより、斯名付」と簡略に地名の由緒を記している。六浦は、鎌倉の外港として栄え、室町期初頭には琉球船が漂着したという伝承もある（『南方紀伝』）。

(8) 天智七（六六八）年〜天平勝宝元（七四九）年。天平年間に、寺院の建立、架橋や池の開鑿などに従事しながら、民間に仏教をひろめた伝導者。東大寺の大仏造立に貢献し、大僧正となる。

(9) 持統三（六八九）年〜宝亀四（七七三）年。相模国出身とも。新羅僧審祥について華嚴を学び、東大

寺の建立に貢献した。

- (10) 天平五（七三三）年に来朝した南天竺の僧・菩提遷那の尊称。東大寺大仏の完成を祝う落慶供養の導師をつとめた。

- (11) 一丈六尺（約四・八五m）の略。立っている仏像の高さを示す基本的寸法。坐像の場合にはその半分、八尺を丈六と称する。最も早い例は『日本書紀』欽明天皇六（五四五）年九月の記事に見える。

- (12) 聖武天皇の御后。父は藤原不比等。東大寺大仏の造営をはじめとする聖武天皇の仏教興隆は光明皇后の力によるところが大きいとされるので、ここに登場する。

- (13) 清浄泉寺の名前は、正徳二（一七一二）年長谷寺と光明寺が出した本末の変更届に「鎌倉大仏清浄泉寺儀」とあるのが最初である。この後の紀行文等でも清浄泉寺あるいは浄泉寺とあるので、両方使われていたであろう。ただし、この年に、正式名称として高德院の名が寺社奉行に届けられているから、清浄泉寺は一般的に称されていた名前と思われる。

- (14) 鎌倉大仏の東側の山をいう（『新編鎌倉志』）。『鎌倉攬勝考』には「見越ヶ嶽」で大仏を見越すことによる呼称かと言っている。

- (15) 鎌倉大仏の奥の大谷から由比ヶ浜に流れる川。鎌倉初期には鎌倉の西の境界とされ、頼朝は父義朝の頸を稲瀬川に迎えていることが知られる。

- (16) 『万葉集』にうたわれる鎌倉を流れる川。水無能瀬河の比定地には万葉学から論義されたが、稲瀬川をさすと考えられている。

(17) 享保十九(一七三四)年成立の養国撰「獅子吼山景境並下乗橋之事」(『縁起』乙本上巻所収)に、橋に關して次の伝承を載せる。大仏東方の御輿嶽に発する水と、大仏西方の大仏切通の山谷より流れる水が、落ち合う所(大仏境内)に古くから橋が架かつていたという。正徳(一七一〇―一六)頃、祐天上人がここに新たに橋を架け直した。橋は往古より下乗橋とも地蔵橋とも称していた。橋杭には地藏の尊像が切り付けてあつて、橋杭を代えると夜中に橋下に戻つてしまふとの里伝である。また同書に、橋杭の姿として「阿弥陀・釈迦・薬師・大日ノ種字少シ頭レ見エ」と、地藏ばかりではない姿形を記しているが、享保頃には橋杭が現存していたようだ。

(18) 治承四(一一八〇)年の源頼朝の拳兵につづく乱。同年十二月、平重衡が東大寺を焼き衝撃を与えた。
(19) 保安二(一一二二)年、建永元(一二〇六)年。法然に師事した念仏僧。東大寺再建の勸進僧として活躍。南無阿弥陀仏と号した。

(20) 右大將は建久元(一一九〇)年に頼朝が上洛した際に任官した武官の官職。一ヶ月ほどで辞去したが、以後「前右大將」と頼朝の通称とされた。

(21) 頼朝夫人政子。建久六(一一九五)年三月の東大寺供養に頼朝・頼家と參詣した。頼朝死去後も「二位尼」として絶大な力をもつた。

(22) 頼朝の嫡子頼家。頼朝の死後に將軍に就任したが、建仁三(一二〇三)年、北条時政追放に失敗して伊豆修善寺に幽閉され翌年殺害された。

(23) 頼朝らにつかえる女房らしい。『吾妻鏡』などには見えない人物である。大仏と稲瀬川の關係から創

出された架空の人物であろうか。また稲多（イタ）と関連して「イナダ」と読んで連想されるものには、謡曲『大蛇』にみえる櫛稲田姫があり出雲での大蛇退治の語りに登場する他、鎌倉大仏と近い江ノ島の『江島縁起』には大蛇が人を喰う伝説が語られる。あるいは、連関しているかもしれない。このほか、世阿弥の『申楽談義』には東海道の守神の娘に「稲田姫」というのがみえる。関連して紹介しておく。

- (24) 建久六（一一九五）年三月十二日の東大寺供養の内容は、『玉葉』『吾妻鏡』『東大寺統要録』にみえ、公武こそぞつての盛大な儀式であった。儀式の当日は、大地震があつたのち、西風がはげしく吹き、黒雲がおおつて土砂降りであつたが夕方には晴れになつたとある。一方、文中引用の「東大寺の縁起」に関する書物には『統群書類従』所収本『東大寺縁起』があるが、文中に知られる奇瑞などの記載はこの『東大寺縁起』にはみえない。

- (25) 第八十二代天皇。建久九（一一九八）年院政をとる。承久の乱により隠岐に配流された。東大寺の再建には、大仏開眼供養、大仏殿建立供養、総供養の三回の供養が行われたが、これは第二回目の大仏殿建立供養のことで、源頼朝と後鳥羽院が列席している（『玉葉』『吾妻鏡』など）。

- (26) 天承元（一一三一）年、建暦二（一一二二）年。法相宗の学僧。文治五（一一八九）年、興福寺の別当権僧正に任じられ、建久六（一一九五）年三月、東大寺大仏殿の落慶供養の導師をつとめた。

- (27) 堂塔の完成を祝つて、讃嘆の偈を唱え、呪願文を読み上げる僧。

- (28) 保延四（一一三八）年、文治三（一一八七）年。東寺の二長者。建久三（一一九二）年東大寺別当、

建久六（一一九五）年の大仏殿落慶供養で、呪願文を読み上げた高僧。興福寺別当覚憲は兄。

(29) 東大寺における授戒の式場である戒壇院の院主であったが、その経歴は明らかでない。

(30) 盧舎那仏如来、毘盧舎那仏（如来）ともいい、『華嚴経』『大日経』『金剛頂経』等の經典に基づいて、「輝きわたるもの」の意をもち、太陽神をもとに成立した仏。

(31) 正午を過ぎたら食事をとらないなど、仏教の戒律を保つ日。信仰上の特別日で、毎月八・十四・十五・二十三・二十九・三十日の六日をいう。

(32) 本地とは、仏・菩薩が人を救済するために仮に神の姿となって現れる本地垂迹説の仏・菩薩のことで、八幡神の本地が無量寿仏すなわち阿弥陀如来であることをさしている。

(33) 浄光、定光とも。鎌倉大仏の勧進聖であるが『吾妻鏡』に鎌倉大仏の勧進聖として記されるほか詳細は不明。本縁起には『吾妻鏡』の記事を参照しつつ事績を述べるが、東大寺重源の高弟、遠江の人とする。また、和賀江島の築港にかかわった「往阿弥陀仏」を浄光と見ている。

(34) 『吾妻鏡』暦仁元（一二三八）年三月二十三日条の引用で、大仏殿の事始め、すなわち今後の堂宇建築の予定を決める一方で、二ヶ月後の同年五月十八日条から、大仏の頭を挙げる作業が行われていることを記している。

(35) 『吾妻鏡』によれば、大仏殿事始めの少し前の暦仁元年一月二十日に將軍頼経は、京都に向かって出発し、同年十月十九日に鎌倉に帰っている。ただし、四条天皇はこの時八歳であるから、四条院が大仏を建立するはずはなく、その話も無かったと思われる。

(36) 東大寺大仏鑄造に際して、天平二十(七四八)年聖武天皇が宇佐八幡を勧請して以来、八幡宮が東大寺の守護神とされたのに因んで、鎌倉大仏建立に際しても祀られたのであろうが、小八幡の名は遺されていらない。

(37) 『吾妻鏡』仁治二(一一四一)年三月二十七日条の引用。同日に、大倉北斗堂の立柱棟上の儀式があり、北条泰時以下が出席しているのに対し、大仏殿は「棟上之儀云々」としか記されていない。

(38) 『吾妻鏡』仁治二(一一四一)年四月二十九日条の引用。

(39) 『吾妻鏡』寛元元(一一四三)年六月十六日条の引用。

(40) 生没年未詳。大藏卿法印とも尊称された鎌倉時代の高僧。寛元元(一一四三)年六月十六日、木造の阿弥陀大仏と大仏殿の完成を祝う開眼供養で導師をつとめた。また寛元四(一一四六)年四月には、北条経時の落髮に臨み、その戒師をつとめる(『吾妻鏡』)など、鎌倉幕府ならびに北条氏から厚い帰依をうけたが、詳しい行状は知られない。

(41) 頼朝の父。鎌倉に居館を維持して周辺領主との主従関係を強めたが、平治の乱において平清盛に敗れた。居館の場は寿福寺と伝える。

(42) 源頼朝が、文治元(一一八五)年、父義朝の供養のために建立した寺院。大御堂ヶ谷にあった。

(43) 伊勢神宮の末社で甘繩神明社をさす。『吾妻鏡』建久五(一一九四)年六月二十六日条他に頼朝の参詣記事があり「甘繩宮」と通称されたとみえる。『新編相模国風土記稿』に、神体は源義朝が帰依していたと記している。

(44) 『吾妻鏡』寛喜四(一二三三)年七月十二日、七月十五日、八月九日条の引用。往阿弥陀仏が浄光と同一人物である史料はないが、可能性は否定できない。浄光上人という僧を、船着場工事等大事業を完成できるような僧とすることに起因する。

(45) 『吾妻鏡』寛元五(一二四七)年九月一日条の引用。

(46) 五代將軍九条頼嗣。鎌倉深沢に金銅の大仏を鑄造するのは、次代の宗尊親王のときであるが、勸進の興行をなしたと記している。

(47) 『吾妻鏡』建長四(一二五二)年八月十七日条の「奉鑄始金銅八丈釈迦如来像」とある記事を引いているが、釈迦如来像は誤記と考えられている。縁起の「宗尊親王の大外護」は、この年に十歳で將軍となったことを引用している。「五丈余」は、享保十九(一七三四)年「鎌倉大仏修造勸進帳」に像高と細部の寸法が記されており、その中に「仏身惣高五丈」と実測したのによつているのであろう。

(48) 稲多野局の没日が建長五(一二五三)年五月二十三日とあるが、この日は鎌倉大仏の供養導師をつとめた勝長寿院前別当良信の没した日(『吾妻鏡』)と同じに設定されている。

(49) 康元元(一二五六)年四月十五日の開眼供養は他の史料にはなく未詳。ただ、この時の導師として高野山別当檢校理賢阿闍梨が恵智坊を遣わしたことから、以下愛染明王が清浄泉寺に奉納されるまでの記述は全て『高野山縁起通念集』(一無軒道治輯)によつていられる。鎌倉と高野山との密接な関係が背景にある。

(50) 高野山金剛峰寺二十九世檢校。建久元(一一九〇)年十月十一日示寂。前注(49)の康元元(一二五

六) 年の大仏開眼供養時には生存していないので整合性を欠く。

(51) 伝不詳。高野山の僧。あるいは無住の『沙石集』巻十にその名が見える恵智坊と同一人物か。

(52) 鶴岡八幡宮寺の供僧が止住する院家は二十五あったことによる。深沢の北部には院家の料田が設定されていたが、大仏との関係は不明。

(53) 恵智川・愛智川・愛知川とも。近江国(滋賀県)琵琶湖にそそぐ(『大日本地名辞書』)。

(54) 高野聖との関連から、高野山領紀伊国富貴荘(和歌山県高野町)であろう。同荘には鎌倉幕府の得分が設定されていた。

(55) 高野山金剛峯寺の諸院のひとつ。恵智房の居所のことは鎌倉期の記録に確認され、本尊の愛染明王は頼朝から下賜されたと伝える。

(56) 三面六臂で、弓矢などを握る全身赤色の忿怒尊。本地は大日如来。

(57) 建保五(一二二七)年、嘉元元(一二三〇)年。大和の人。西大寺を中興した叡尊について出家し、戒律を学んだ。その後、戒律の布教をめざして東国に下り、常陸国三村山清涼院に止住した。北条重時の葬儀の導師を勤めた頃から、北条氏との関係が深まり、鎌倉幕府のなすべき社会事業に尽力した。弘安七(一二八四)年には、鎌倉の二階堂永福寺、五大堂明王院、ならびに鎌倉大仏殿など三ヶ寺の別当職に補任され、兼ね勤めた(『性公大徳譜』)。なお忍性をはじめとする叡尊門下の律僧が鎌倉大仏と関わりをもつようになったのは、叡尊が鎌倉に下向した弘長二(一二六二)年以後のことであり、同年五月一日に、忍性の同法頼玄が、大仏悲田で社会の底辺に生きる人々に十善戒を授けている。

(58) 忍性一代における功績に関しては、『性公大徳譜』ほかに詳しい記載がある。西大寺の叡尊の門下で戒律を学び、とりわけ文殊菩薩を深く信仰し、社会の底辺に生きる人々に眼を注ぎ、慈悲行を實踐した。北条氏の要請に応えて鎌倉の極楽寺の住持に就くや、積極的に社会事業に乗りだし、寺院の創設、道路の整備、医療施設の開設、橋や港の修築などに尽し、菩薩と称された。

(59) 生没年未詳。鎌倉幕府の和歌所の奉行をつとめた歌学者。『源氏物語』の研究に取り組み、建長七年(一二五五)年、河内本『源氏物語』を完成させた。

(60) 仁治三(一二四二)年における京都・鎌倉間の旅行記。作者未詳。一説に、鴨長明、源光行、源親行らの名が伝わっている。

(61) 建武二(一三三五)年、北条高時の遺児時行が諏訪氏らの旧北条氏勢力に擁立されて、鎌倉の足利直義の軍勢を追いだして占拠するも、まもなく足利尊氏の軍勢の反攻にあい敗北して自害した事件である中先代の乱の様子を詳述している。『太平記』によれば、時行の軍勢は鎌倉を占拠したのちの八月三日、名越式部大夫を大将にして京都へ攻め上ろうとしていたときに、夜になって大風となり避難して鎌倉大仏の大仏殿に逃げ込んだところ、大仏殿の棟梁が破壊されたために、身を寄せ合うように避難していた軍勢五百人ほどが圧死したと見えている。その後、西国に向かった軍勢は尊氏に押し戻され、最後に残った時行ら四十三人は勝長寿院で自害したが、死骸は顔の表面を削って、誰が誰と確認できない状態になっていたと伝えている。

(62) 『鎌倉大日記』応安二(一二六九)年九月三日条の引用。

(63) 生没年未詳。室町時代の禅僧・大素素一のこと。建長寺三十五世了堂素安（『延宝伝灯録』十七）の弟子。門弟に建長寺九十二世の慶堂資善がいる。

(64) 明応四年の地震は『鎌倉大日記』の引用だが、実は、明応七（一四九八）年八月二十五日の大地震をいう。津波が大仏殿まで押し寄せた。なお、この時の地震で浜名湖は遠州灘とつながった。

(65) 風指すなわち人差指が親指より上に出ていることが、年来の風災をおこしているとの指摘であるが、この形の印相は他にも平安時代の大分・竜願寺や滋賀・阿弥陀寺の阿弥陀如来像などの例があり、阿弥陀定印の一形式である。

(66) 寛永十四（一六三七）年陸奥国岩城郡（胆沢郡）新倉村生。十二歳で得度、のち諸国遊学し、元禄十二（一六九九）年下総国生実の大蔵寺に住したのをはじめ、元禄十三年には同国飯沼の弘経寺に転じ紫衣を賜い、宝永元（一七〇四）年江戸小石川伝通院に転住、正徳元（一七一）年増上寺三十六世大僧正に就き、享保三（一七二八）年示寂、世寿八十二歳、明蓮社大僧正顕誉上人愚心祐天和尚（『浄土宗全書』）。『縁起』によれば、下総国牛嶋に隠遁中、鎌倉大仏の荒廃せるを拝し、他日に寺坊建立を発願したるによって高德院の中興となすとある。

(67) 中世禅院における官寺制寺格。鎌倉五山十刹と京都五山十刹がある。鎌倉五山と関東十刹を紹介しておく、時期により変動もあるが、鎌倉五山は建長・円覚・寿福・淨智・淨妙の各寺、十刹は瑞泉・禅興・東勝・万寿・長楽・国清・大慶・円福・善福・東光の各寺（『続群書類従』『改訂史籍集覧』）。

(68) 奈良・東大寺大仏、鎌倉・大仏、京都・方広寺大仏をさす。

(69) 源親行の紀行文とされる『東関紀行』に仁治三(一二四二)年鎌倉を訪れて、「金銅、木像のかわりめこそあれども」と、東大寺大仏は金銅像であるのに対して、この鎌倉大仏は木像であるという記事を引用している。

(70) 千葉県千葉市中央区生実。同地の龍沢山玄忠院大蔵寺は浄土宗関東十八檀林のひとつ。関東十八檀林は、江戸増上寺・鎌倉光明寺・江戸伝通院・瓜連常福寺・飯沼弘経寺・新田大光院(以上紫衣檀林)、勝願寺・東漸寺・大蔵寺・蓮馨寺・弘経寺・八王子大善寺・岩槻浄国寺・善導寺・幡随院・靈巖寺・靈山寺・大念寺。

(71) 茨城県水海道市。同地の浄土宗寿亀山天樹院弘経寺は浄土宗関東十八檀林のひとつ、徳川秀忠の息女千姫(天樹院)ゆかりの寺。

(72) 東京都文京区。同地の無量山伝通院寿経寺は浄土宗関東十八檀林のひとつ。紫衣檀林。徳川家康の生母於大(伝通院)、秀忠の息女千姫(天樹院)、家光の室(本理院)などの墓所がある。

(73) 三縁山の略、増上寺の山号。同寺は浄土宗関東十八檀林の筆頭、僧祿所、徳川將軍家歴代の菩提所。祐天は正徳元(一七一)年、小石川の伝通院から出世し増上寺の三十六世大僧正に就いている。増上寺貫主は、小石川伝通院、鎌倉光明寺、飯沼弘経寺などからの出世入院を慣行としていた。

(74) 鎌倉大仏の荒廃している様子は近世初期の紀行文などに散見される。因みに、英国船舶船長ジョン・セーリスの『セーリス日本渡航記』(慶長十八「一六一三」年九月十二日条)に「予らはこの像の上に旅客がつけたたくさんの文字やしるしを見た。予の従者のある者はそれをまねて、同様に自分のを書

いた」。また、英国商館長リチャード・コックスの日記（『日本関係海外史料 イギリス商館長日記』元和二〔一六一六〕年十月十八日条）に「四八〇年以前に造られたものであるため仏殿はまったく朽ちはてている」とある。

- (75) 延宝五（一六七七）年五月二十一日生まれ、宝永元（一七〇四）年四月十二日没。館林宰相（綱吉）とお伝の方の子。延宝九年に紀伊綱教と縁組。法名は明信院。増上寺に葬られる（『徳川実紀』等）。

- (76) 元禄十六年（一七〇三）十一月二十二日夜当地方を襲った大地震、所謂「元禄の大地震」である。この地震は大仏をはじめ鎌倉中の寺社にも甚大な被害を与えた。翌宝永元年（一七〇四）九月七日幕府代官小長谷勘左衛門宛の口上では「大仏前之方台座之石段崩、大仏三尺程下傾申候」と被害を報告している（『公儀等指出書類』高徳院所蔵）。

- (77) 宝永四（一七〇七）年七月十一日生まれ、同年九月二十八日没。六代將軍家宣と右近の方の子。法名は智幼院、増上寺に葬られる（『徳川実紀』等）。

- (78) 宝永五（一七〇八）年十二月二十二日生まれ、同七年八月十三日没。六代將軍家宣とお須免の方の子。法名は理岸院、小石川伝通院に葬られる（『徳川実紀』等）。

- (79) 元禄地震による石段等の修覆は祐天上人によって正徳年中に行われている（『公儀等指出書類』高徳院所蔵）。

- (80) 鎌倉大仏の復興と最もかわりの深い人物。「縁起」が野嶋新左衛門（泰祐）の事績に多くの紙幅を

割くのも同氏が大檀越として復興の立て役者であるからであろう。江戸浅草住、祐天上人の大仏復興への合力、常念仏の興隆の志願、法名高德院をもつて寺号授与、そして突然の遠島罪と赦免、さらに高德院住職として養国の推挙、常念仏の復興など野嶋新左衛門の波瀾万丈の履歴はこの『縁起』によって知るのみである。文化四（一八〇七）年「大仏高德院略記」（高德院所蔵）には「寛保三年四月十日泰祐江府にて終命す」とある。

(81) 野嶋新左衛門泰祐の妻の法名。『縁起』には妻の浄泉院が新左衛門へ祐天上人宿願の念仏道場建立費用の寄進を勧めたとする。

(82) 間断なく弥陀の名号を唱えること、常念仏とも称す。慈覚大師遷化に遺言して本願不断念仏を修したことが本邦の濫觴と伝う。その後とくに浄土宗徒の間に不断称名の風が盛んとなる。

(83) 伊勢の人。江戸にて修学を重ね、江戸霊岸寺、上野国新田大光院、鎌倉光明寺五十四世と転住し、正徳四（一七一四）年六月増上寺三十七世。享保二（一七一七）年三月十八日示寂。雄蓮社大僧正松誉上人忠阿触光詮察上人、世寿八十歳（『浄土宗全書』）。

(84) この頃の大仏は、鎌倉長谷の浄土宗長谷寺の支配下にあった。長谷寺の支配を離れるのは正徳二（一七一二）年五月二十五日である（「公儀等差出書類」、高德院所蔵文書）。ただ、延宝二（一六七四）年徳川光圀の『鎌倉日記』には「初八建長寺ノ持分ナリシガ、今ハ光明寺ノ持ナリ」、また貞享二（一六八五）年刊の『新編鎌倉志』には、「大佛は大異山浄泉寺と號す、（略）建長寺持分なり」とあり、光明寺・建長寺と大仏支配には混乱が見られる。さらに、寛永九（一六三二）年十一月「浄土宗

光明寺・大長寺本末帳」には「鎌倉長谷村 長谷寺」が浄土宗光明寺末と記載され、また寛永十年「相州鎌倉建長寺末寺帳」には「海光山長谷寺」が建長寺末寺として書き上げられている。大仏を管理する本寺と宗派の關係は近世初期以降はなほだ混乱している。

(85) 正徳二(一七二二)年五月二十五日、長谷寺の支配を離れた大仏は鎌倉光明寺の末寺として位置づけられた(「公儀等差出書類」高徳院所蔵)。

(86) 野嶋新左衛門が祐天上人發願の常念仏堂のための寺地を買い求めた事實は、正徳二(一七二二)年八月「賣渡申田畑證文之事」(高徳院所蔵)に見える。この證文の發給者は鎌倉長谷村・坂ノ下村畑売主・村役人二十人の連署で、宛所は増上寺役者・御立会雲洞和尚・御買主野嶋新左衛門とある。当地は、天領の田島永別高四貫六五七文、及び反錢三二四文。この地を売り渡し、絵図・百姓水帳を副えると記載する。

(87) 恵心僧都源信の別称。天慶五(九四二)年、寛仁元(一〇一七)年。平安中期の天台宗の学僧。横川に住み、「横川僧都」とも呼ばれた。『往生要集』の作者。

(88) 文政七(一八二四)年「相州鎌倉獅子吼山清浄泉寺高徳院書上」(高徳院所蔵)に「一阿弥陀如来但坐像五寸五分 二分坐 右恵心僧都之御真作也」とある。現存。

(89) 中国浄土教を大成させた唐時代の念仏僧。『観経疏』など五部九卷を数える著作がある。法然に大きな影響を与えた。

(90) 法然房源空の大師号。法然は、浄土三部経と中国の僧・善導の『観経疏』の所説によって、専修念仏

の教義をたてた。

(91) 増上寺祐天大僧正は野嶋泰祐の善根を讀え法名高德院を授け、その法名を以て寺の院号とした。寺名「高德院」の成立は不詳だが、史料の初見は正徳四（一七一四）年二月「長谷大仏高德院本山勤方之定」（高德院所藏）である。

(92) 伝通院、靈巖寺、幡隨院、靈山寺のこと。増上寺とあわせ江戸檀林（府内檀林）という（『大本山増上寺史』）。

(93) 法間の席において大僧正（貫主）と同席に列座する僧（『増上寺史』）。

(94) 増上寺山内の三十の僧坊（『増上寺史』）。

(95) 長谷寺別当。大仏は正徳二（一七一二）年五月二十五日まで長谷寺の支配下にあつた。『新編鎌倉志』長谷寺挿図には、寺中に「慈眼院」「慈照院」が描かている。注（84）参照。

(96) 承応三（一六五四）年生まれ。幕府の關東御代官衆の一人。宝永二（一七〇五）年の記録によれば、知行地は武蔵で三〇〇俵である（『御家人分限帳』）。

(97) 正徳四（一七一四）年五月に正徳金銀の改鑄が行われ、それに対して十月に野嶋新左衛門が異議を唱えたが、それにより金銀流通の遅れたのを咎められ、十一月流刑に処せられた。新井白石『折たく柴の記』参照。

(98) 伊勢の人。靈山寺・大光院・光明寺に歴任し、享保二（一七一七）年増上寺三十八世貫首、大僧正。光明寺五十六世。享保十五（一七三〇）年示寂（『浄土宗全書』）。

(99) 松平忠周の妻。忠周は天和三(一六八三)年に丹波亀山三万八〇〇〇石の城主となる。宝永三(一七〇六)年信州上田城主五万石となる(『諸侯年表』)。

(100) 内藤義孝の妻。義孝は貞享二年(一六八五)陸奥磐城平城主七万石となる(『諸侯年表』)。

(101) 江戸の人。小石川伝通院に修学、のち縁山で経論を講演し、弘経寺・光明寺五十七世に転住。享保十一年(一七二六)年増上寺三十九世、大僧正。享保十七年示寂(『浄土宗全書』)。

(102) 長承二(一一三三)年、建暦二(一一二二)年。承安五年(一一七五)、四十三才の時、専修念仏の教義をたて、浄土宗を開く。著書に『選択本願念仏集』がある。

(103) 不断念仏の信仰集団として高德蓮社が結成されその結衆人となった。

(104) 美濃の人。武蔵無量山に登り、のち増上寺に修学、幡随院・飯沼弘経寺・鎌倉光明寺に歴住、元文三(一七三三)年京都知恩院四十九世大僧正、延享二(一七四五)年四月示寂、世寿七十六歳。名蓮社称誉真察円阿(『日本高僧伝』)。

(105) 江戸期、鎌倉大仏の復興に尽力した実質的な中興の僧養国上人。師は岩附浄国寺の不慮円竜大和尚。円竜は増上寺の祐天・詮察・演誉の三代の間に知事として勤仕。鎌倉大仏の復興に熱心であった僧正たちからの影響か、円竜自身も大仏に関心をよせ、弟子である養国も影響をうけたようだ(『大仏鑄掛修覆托鉢願之日鑑』高德院所蔵)。同書に「拙僧(養国)不思議縁_三而生を此辺に得、少年より此大仏_三御縁を結び、出家之後祐天大僧正建立_三付、我其時_三大仏再興之志願発りき」とあり、生地は鎌倉周辺であろう。野嶋泰祐と親子の縁を結び、泰祐の推挙により享保十八(一七三三)年大仏住職とな

る。入院以降は大仏修復復興に尽くしたが、寛保三（一七四三）年三月の失火により堂宇を焼失し、宝曆四（一七五四）年田戸（横須賀市）聖徳寺に隠居し、宝曆十一年八月二十九日同寺で示寂。浄蓮社薫誉上人到阿養国円宿和尚（「大仏高德院略記」高德院所蔵）。

(106) 仏眼山英隆院と号す。浄土宗。岩附城主太田氏房が天正十五（一五八七）年に、惣誓清巖を開山として建立。浄土宗関東十八檀林の内、江戸檀林五ヶ寺を除く、田舎檀林十三ヶ寺のひとつ（『埼玉県の地名』）。

(107) 養国上人の師。

(108) 享保十九（一七三四）年五月、大仏別当高德院は寺社奉行所に宛願書を提出した。趣旨は「大仏尊像破壊之所鑄掛修覆仕度」ので、七ヶ年の間「御当地町中托鉢仕候儀御免被成下」との事であった。この願いに対し、寺社奉行所は「沙門托鉢仕候儀者勿論之事に候間、勝手次第托鉢可仕候、尤依願御免旨申筋に者無之候」との見解が示され、この願は官許を要しないものとして処理された。大仏の托鉢勧進は法制上からいえば許可対象外であった（「大仏鑄掛修覆托鉢願之日鑑」高德院所蔵）。

(109) 両肩を衲衣が覆う着衣形式を通肩という。日本の如来像は、多くが衲衣を偏袒右肩に着けるか、あるいはさらに偏衫が右肩を覆うが、鎌倉大仏は衲衣を通肩に着ける日本でも数少ない像である。

(110) 古代インド・摩揭陀国の国王・頻婆娑羅の後で、阿闍世太子の母。浄土經典の『観無量寿経』は、頻婆娑羅王が太子に幽閉させられた夫人の苦悩を描く。

(111) 生年未詳。宝曆二（一七五二）年九月十九日没。六代將軍家宣の側室。左京の局（実名輝子）、はじ

めお喜代の方と称す。宝永六（一七〇九）年に家宣の子鍋松（家継）を生む。増上寺に葬らる（『徳川実紀』等）。

(112) 生年未詳。寛保元（一七四二）年二月二十八日没。六代將軍家宣の御台所（正室）。熙子の方。父は関白近衛基熙。家宣没後、従一位に叙せられ、一位様と称せらる（『徳川実紀』等）。

(113) 生年未詳。元文三（一七三八）年六月九日没。お伝の方。五代將軍綱吉の側室。はじめ桂昌院に仕え、のち綱吉との間に鶴姫・徳松をもうけ、お袋様と称せらる（『徳川実紀』等）。

(114) 未詳。

(115) 天和二（一六八二）年生まれ、明和三（一七六六）年六月二日没。六代將軍家宣の側室。右近の方（お古傘）。宝永四（一七〇七）年に家千代君を産み、一の御部屋と称せらる（『徳川実紀』等）。

(116) 生年未詳。明和九（一七七二）年四月十八日没。六代將軍家宣の側室。お須免の方。御台所熙子の方の僕として下向、のち大助（典）殿と称せらる。宝永五（一七〇八）年大五郎君を産み、正徳元（一七一）年虎吉君を産む（『徳川実紀』等）。

(117) 生年未詳。寛保元（一七四二）年十一月十日没。五代將軍綱吉の側室。大典侍の局、北の丸方と称せらる（『徳川実紀』等）。

(118) 未詳。

(119) 生年未詳。宝永二（一七〇五）年六月二十一日没。三代將軍家光の側室。お玉の方（実名光子）。正保三（一六四六）年徳松（綱吉）を産む。増上寺に葬らる（『徳川実紀』等）。

(120) 京橋の南、新両替町・尾張町の通りに平行している三十間堀に沿った町。当時は一〜六丁目まであった（『東京都の地名』）。

(121) 吉日に同じ。願い事が叶えられた日。また物事をなすに都合のよい日。

明治十四年五月野島ヨリ受取

朱本意

(貼題箋)

大仏高徳院略記

凡例

- ・ここに翻刻する『大仏高徳院略記』は鎌倉大佛殿高徳院所蔵本を底本とした。
- ・翻刻にあたっては、概ね原資料の体裁に従ったが、漢字は原則として当用漢字体のあるものについてはこれを用いた。また、変体仮名は現行の平仮名に直し、者・江・茂・而はそのままとした。なお、欠字は一字あけとした。
- ・解読に便するため、編者の裁量において、読点・並列点を付したほか、本文右側に（）を付し適宜注を施した。
- ・『大仏高徳院略記』の概要は後掲『鎌倉大仏縁起』の成立をめぐって」に記した。

大仏高德院略記

相州鎌倉深沢の里獅子吼山清浄泉寺高德院は、人皇四十五代聖武帝観音垂迹天平九年丁丑三月

染屋太郎時忠を奉行として御草創行基菩薩を開山とす、又良弁僧正弥勒垂迹菩提僧正普賢垂迹に勅

して三師同心に大般若経を写さしめて奉納し、丈六の釈迦・薬師・観音の霊像を安置し、

東三十三州の惣国分寺と定め玉ふ、是を四聖同心の開山と言ふ、清浄泉寺と名るは往昔

黒馬に騎れる真人聖徳太子化作富士山頂より空を踏て降り来り、此深沢の嶺上に駐り清泉を汲

て馬口にそそぐ故実^に任せて名くと言ふ、其時山神化し来て輦を献す、以来郷俗此山

を御輦嶽と称するなり、扱獅子吼山の称号は上古の賢聖此処に来临して説法し玉ふ、後

に宝治二年記主禅師主伴此二止住して説法弘通ある、是によりて後世に至て此山号を立て、

もつて佐介谷悟真寺後又改蓮花寺の奥院と称す、具には奥院記に見へたり、右の経卷仏像安置の

処を内の堂と言ふ、今は廢して水田と成れり、扱大仏は曆仁元年戊戌の頃より始て造立ある、其由来を尋れば、南都大仏殿供養の時、右大将頼朝卿勅によりて上洛ありて守護せらる、其時心中の所願を籠られ、東国におゐてもかくのとき大像を造立し奉らんと、然に其願いまた満せず世を去り玉ふを局イタノノ稲多野と言へるもの深く嘆き、君の所願を繼て大仏を造り奉らんとて、二位の夫人に暇を乞ひ、深沢の傍に住して辛苦修行を経て後ち、夫人も同じく力を添へ八幡宮の御本地無量寿仏の像を造り奉らんと、其事將軍頼經隨喜ありて大外護と成り、俊乗坊重源の弟子遠江国淨光上人を勸進の沙門として都鄙をす、め、人皇八十六代四條院の許命を蒙りて造立を企てられ、仁治二年辛丑三月大仏殿の上棟あり、同四年癸卯二月改
寛元六月木像御長ヶ八丈の大仏供養ある、導師ハ勝長寿院別当良信僧正也、其後寛元の末一日忽大仏殿海風に破らる、尊像も大に損壞壊せり、稲多野是をなき再ひ大願を發し金銅の像を鑄奉らんとす、時の將軍頼嗣卿江申て四方を勧けるに、人

王八十八代後深草院建長四年壬子八月宗尊親王の大外護にて金銅五丈余の無量壽尊成就(皇)まし、大殿等悉く古に復しぬ、康元元年四月開眼供養の導師は高野山別当理賢阿闍梨の弟子智恵坊ちゑぼうなり、此僧尊像の後ろに居て誦念すれば金銅後にかへりみ、前にありて修法すれば尊像また本のことく正面に向ひ玉ふ、不思議の靈像と言ふへし、弘安七年甲申極楽寺の忍性菩薩を大仏の別当に補任せらる、然るに建武の頃相模次郎時行蜂起せしに、名越式部太夫か勢大風を避て大仏殿に遁れ籠し所に、棟木微塵に折て其内に集り居たる軍兵五百余人ソチ圧れて死すと、又一説に軍の謀に大殿を打破り皆々死したる体にもてなし、後の山より常盤の郷江忍ひ越て逃れ去りぬと、其後応安二年己酉九月三日大風に大殿顛倒せり、此時建長寺の大素和尚再建すと此説未審し、豈独力の及ふ所ならんや、修理を加る歟明応四年乙卯人王百四代後土御門院尊氏十一代義澄の時八月十五日東国大地震、由比の浦浪激揚し大仏内の堂・仏閣・僧坊残らず流れ失す、かくのことく大仏殿四度の興廢あり、或道人来りて拝瞻し思惟して言らく、

大仏殿古より毎度の風破ハ尊像の定印相違ある故ならんと、又或真言旅僧拝仰して言らく、此尊像通途の凡作にあらず、定印の違へるは還て密教の奥旨無量寿仏の別徳を顕すものなりと、又或時住僧の夢に三僧来て告て曰、此堂の軒を毎年吹破るは龍神此御仏の御面容を瞻礼せん為なりとそ、かく申伝へ侍る、既に二百余年を経て荒廢するも時哉い
かんせん、然に大仏殿の別当古来より定れる宗旨もなく真言・浄土等交互ニ相代る、されは宝永元年申九月長谷慈照院より御代官小長谷勘左衛門殿藤沢町之役所江届書に、当寺支配鎌倉深沢大仏とこれあり、爰に増上寺顕譽祐天大僧正、往歳師に隨て光明寺に掛錫し大仏の由来を悉くしろしめし、隱遁の後大仏に詣て来り、甚しく荒廢せるを深く悲み玉ひ再興の御志願を籠られ、伝通院住務の節大仏の石座を修復ある、正徳元年卯十二月増上寺江移転ましくて、翌二年辰正月有信の弟子野島新左衛門法名 泰祐を勧誘ありて、公の宿願の如く代りて再興せしめらる、則ち此時高德院と改称して光明寺の寺務所に定

め 公辺江訴江らる、時の光明寺山主ハ松譽詮察上人なり、此時祐天大僧正常念仏を開闢し鉦木を松譽上人江御授あり、程なく高德院堂舎等成就して、同三月十五日入仏供養ハ慈照院より高德院新道場江引移りの大法要ある、御代官小林又左衛門殿より警固の人数差出さる、爾後大仏前の御供養護国の祈念等怠る事なし、然るに其後間もなく正徳二三年の頃野島氏御咎めの事ありて遠流に処せられしかは、常念仏相続しかたきに付て、時の光明寺主演譽白随上人縁山松譽大僧正江申達し、大僧正より閑居祐天公江御物語ありて、各々浄財若干喜捨し玉ひて勤行相続す、享保六年辛丑三月野島泰祐御赦免を蒙り東武江帰参す、されとも去る頃家財闕所ニ相成けれハ資財もつきぬ、有為の転変哀歎にたへたり、されば同年夏の頃にや、泰祐来て山主学誉岡鑑上人江謁し、在島の内諸人江念仏を勧進せる次第、是も本師の御庇カケと具ニ物語入、彼為剃髮染衣を乞ふ、上人知見ありて許されず、恐々勸導を加へらる、泰祐感服して帰府す、同十八年丑三月泰祐来て山主称譽真察上人江相願候

故、其意に任せて養国を高徳院住持に申渡さる、是則住持職の始なり、此時養国一代限りに金入袈裟を許容せらる、寛保三年癸亥三月八日昼時高徳院廊下の屋上より失火、一字不残焼失す、あ、天災是非もなき次第也、同四月十日泰祐江府にて命終す、誠に時節到來止むことを得ず、諸勸物・祠堂財を以て仏堂・住居を再建す、其以来は常念仏も中絶せり、夫より十余年過て宝曆四亥年養国隠居す、又本山の指揮によりて田戸聖徳寺に住持し、彼寺再建の企て丹誠あり、同十一年八月廿九日田戸_二而命終

第二代 彰誉然的 宝曆四亥年住職
天明六年隠居

第三代 然的弟子往誉良然 天明六年住職

第四代 載誉大了 寛政七卯年住職
文化四卯年依願隠居

一往昔金銅大仏の鑄工は西上総矢名村金谷_ヤの里、大野五郎右衛門と言ふものなり、寛政九巳年夏載誉代、今の五郎右衛門妻大仏に参詣して住持へ物語に、私先祖此尊像を鑄

奉り、爾來式十四代血脈相續き、代々長命にて分家三十六軒是れあり、私方本家にてうんぐわ(頭書)「うんぐわハからすき也」を鑄立候斗を業とし分家の内六軒は諸の鑄物を家業といたし、何れも古來より火災に遇ひ候事これなく、殊に拙宅は先祖より盜難もなく、それ故に年中戸かけかねの用心にも及び申さず、偏ニ此尊像の御守と有かたき御事ニ候と、仍而家内幾人と尋候得者、近年者不如意ニ相成式十六人くらしと申せしとなり、然れば昔より家柄の物と聞江たり昔し時の將軍様より拝領の品、只今はこれなしとぞ

一 藤沢駅の近所宮ノ前村、友右衛門と言ふもの、享和三亥年夏の末大仏に參詣し、や、暫ク平伏し頭を挙て拝仰しました平伏す、かく三度迄懇懃に拝し候上、勤番の老僧養覚江対し、扱も難有御事、拙者儀者若年の時參詣せしま、数十年を経て今日參詣仕候、三十六歳の時妻に別れ幼年の子共(僅)兩人は母の手にて養育に預り、最早生長いたし候故村役も退役し、西国靈場巡拜の意願これあり候得共、兎角去りかたき事とも差まとひ所

願を果しかね候、長谷観音様へは月参りいたし候得共、大仏様をば通りかけにかつくりと頭を傾け候のみ、今日何となく御参りいたし度心起り候て参拝仕候処、尊像御目をしばくとじ玉ふを見上げ、はつと平伏し、銅仏様の何に故にと存し頭をあけ見候得ば、またしばくと初のことくし玉ふ、さてく有かたき御事かなと感涙を流しける、養覚申候は、左様の事もあるへし、先年伯耆の国の道者老翁老婆参詣して敷石ニひれ伏し落涙し暫く有て申様には、大仏様御笑ミを含み御目を動し玉ふを兩人とも正しく拝し奉りぬ、四国回りの時某処ニてもかくのとき事を拝し、今日共両度難有事を拝み候と言ひき、其元と申し事以前ニもありと、夫より友右衛門高德院住持に相見し、何卒例月の百万遍念仏を御始め下されたしと相願ふ、尤搆中（巻）ハ拙者も相勤め候わんと、住持是を許諾しければ則歸りぬ、九月初度ニ友右衛門来て弥以て今月より始を起し玉へと乞ふ、よりて十四日を定日とし開闢す、其以来例月不断相続すといふ

第五代等譽專教文化四卯年十一月七日住職

等譽者九品寺より移転なり、九品寺住務之内抜群の功勞有之ニ付、褒美として高德院住職之、即日金入袈裟御授与、尤永代寺附御聽許之證狀如左

證狀

金入袈裟着用之儀 公法兩制御嚴重実不容易事、然大仏清淨泉寺高德院者古來東三十三州之惣国分寺、佐介谷已來 開山禪師之御由緒格別奥院と称号候故、數百年來荒冷ニ付、縁山顯譽祐天大僧正有信之弟子野島某を開基ニ被頼命中興有之、当山寺務所ニ被定置、其後享保之末当山称譽真察上人、時之住僧養国江金入授与一代限聽許、爾後暫中絶之処、現住等譽九品寺住務之内、多年志願を以蔵本補欠料、開山前御供養料莫大之淨財獻納有之、其精誠山主御感悦、即為褒賞金入袈裟被着当所近郷限永代為寺附御許容被成候、但

公辺表・諸檀林向・京都本山江者披露無之候間、其旨可被相心得候、且他所・遠方江広着用者遠慮可有之候、寔当山者関東本山之故を以、任先例開山前之為御名代、今度格段之御聽許候、為後來證明、仍而連署如件

天照山七十九主薰誉上人御代

役者 惠 達 印

同 貞 雲 印

文化四丁卯年

同寺家役 慈 海 印
蓮乘院

十一月七日 千手院 英 全 印

大仏御別当高德院

等誉専教和尚

上件之趣後代龜鑑無相違者也

仍加璽章

天照光明寺七十九主

宝香阿薰誉



押花

金入方袍

等誉専教師

中興主

一高德院住職之儀ニ付、先ッ内寺之定格を知るへし、凡武家方之内寺并開基檀那有之寺院

住職之人者移転隱者・他山僧者不相成、惟自山満年以上之僧ニ限り候条縁山寺之定式ニ

候、然ニ高德院者正徳年中より開基檀那相定り、住職隱者共開基之願ニ任せ候者勿論ニ

候、乍然強而内寺之定式_ニ者不相拘候、尤当山末ハ移転不相成先例_ニ候得共、高德院者当
山奥院故諸余末山之例_ニ者不差構、移転隱者・他山僧共解行相応世寿四十歳内外之人江
住職被仰付候儀、当山之別格思召次第_ニ候事

一同院表御礼式_者前來記録之通御内礼并金入袈裟頂戴之御礼式、今度相定別致記録置事

一同院住職年を経候_而も職分不似合之儀於有之者慥_ニ相糺し候上嚴重_ニ可被仰付、勿論金
入袈裟ハ暫く 開山前江御取上之事

此条 開山前江薰誉上人被申上置候事

一同院者独礼格、諸末山ハ惣礼格_ニ候、然_レ一同院拝席之儀、興誉正合上人代_ニ者新末同様本
堂外陣拝礼也、是ハ時之役向甚不相当之取計也、現誉満空上人代_ニ者内陣内巻畳目_ニ而
古末山と同様拝礼也、是ハ不案内之取計也、其訳者六役者惣礼寺なれ共、役席_ニ而内式
畳目独礼拝席也、高德院者本より独礼なれば六役と内拝席_ニ而相当也、見誉上人・倫誉

上人此兩代ニ者拜礼不相記、病氣不參ニ候し歟、後來独礼拜席異儀無之候、其故者学嘗問鑑上人代奥院と御定、洞誉玄達上人代元文五申七月奥院記ニ末山一臈（臈）之上座山主之左席と有之候、明鑑如此候、其以來之役向不案内千万也

但、高德院ハ大法要之節者内陣詰ニ而山主之左席と申儀ハ無之候、然者拜礼ハ諸余末山相濟候上、卷軸ニ独礼拜席然也

一此度思召を以相定候、御忌・善導忌・開山忌右三度御法要之節、高德院者七條着用ニ而暫後門ニ相控居、双盤頭付ケ即刻帳場案内ニ而御導師後方ニ着席、末山不残焼香拜礼、相濟候上引続ニ罷出、先ツ導師前江問訊し正面少し脇より斜に焼香三拜、畢而亦問訊し直ニ後門江退去、於御居間御斎御相伴之事、將又無余儀故障有之時者御初夜法要之節拜礼準上応知、右三度共献備之品中蠟燭三拾挺改礼等無之、且又十夜之節者混雜故拜礼無之

勝手次第参詣之事

正月元旦御雜烹御相伴之事^(兼)

一 祖師方開山前御遠忌、或ハ大修復供養等之節者同院五條着用内陣詰、其結願拜礼之節者七條着用、拜席次第如上

一 御遠忌献備等例書如左

元祖大師五百五十回御忌、宝曆十一巳年正月廿二日興誉上人代、同院御報謝金三百疋、香奠金百疋

光明寺大師千百年御忌、安永八亥年三月十一日現誉満空上人代、香奠金百匹

開山禪師五百年御忌天明六年四月見誉了因上人代、香奠金貳百疋

一 寛政九巳年八月、倫誉上人代、本堂大修復濟供養之節、同院香奠不相記、是落帳歟

一 文化三寅年十月、薰誉上人代、瓜連常福寺本堂再建勸物、高德院分金貳百疋^{是八先年}

本所靈山寺
勸物之例也

文化四丁卯年十一月

七十九主

薰誉上人御代

『鎌倉大仏縁起』の成立をめぐる

鈴木 良明

『鎌倉大仏縁起』の概要と成立期

鎌倉高徳院に伝蔵する『鎌倉大仏縁起』（以下『縁起』と略称）は現在二本が知られている。一本は折本仕立て二帖（以下甲本と略称）、各々縦二七・八cm×横二〇・四cm。表紙は両帖ともに板材を芯にし蜀江錦（翁狩衣）で包む。表紙中央に「鎌倉大佛縁起 上」「鎌倉大佛縁起 下」の貼題箋がそれぞれある。また、この二帖は丁重に扱われてきたようで箱に納まるが、箱蓋裏には「高徳院二世養国上人編并書／鎌倉大佛縁起二卷／大正十二年修補 野嶋」との墨書がある。これにより、現状甲本（上・下二卷）は大正十二年野嶋氏によって修補された経緯を知る。なお、現形態は帖仕立てとなっているが元は冊子体裁であったと思われる。恐らく大正十二年修補時に現形態となったのであろう。

もう一本は冊子体裁三冊（以下乙本と略称）、五ッ目綴、各々縦三〇・五cm×横二二・〇cm。

三冊ともに表紙は花入菱紋、カラ摺表紙。表紙中央に「鎌倉大佛縁起 卷上」「鎌倉大佛縁起 卷中」「鎌倉大佛縁起 卷下」の貼題箋がそれぞれある。

甲本・乙本それぞれの作成年代を見てみると、甲本下巻の最末尾に「享保廿年乙卯春正月如意珠日野嶋泰祐の所望によつて養国謹て識すものなり」とあり、乙本上巻の奥書に「于時享保十九年甲寅歳養国清書之」、また乙本巻下の末尾には甲本下巻と同様「享保廿年乙卯春正月如意珠日野嶋泰祐の所望によつて養国謹て識すものなり」とある。

ただ、乙本上巻は「大仏縁起附録」として「鎌倉根元記第二巻・四巻」「元亨釈書卷二十二」「清浄泉寺建立序次之記（最信之記）」「鎌倉大意 附時忠之事」「東鑑」（二十六卷・二十八卷・三十二卷・三十四卷・三十五卷・四十二卷・四十三卷）「源親行東関記行」「高野山縁起通念集 一無軒道治輯」「和州元興寺之記」「太平記十三卷」「寶永年中訴之書」「南都大佛殿縁起」「北条九代記卷第一」「日本王代一覽卷二」の抜粋史料を収めている。これら抜粋史料は、一例を示せば「木像大佛並頼朝本願之事」と題して「東鑑第三十五卷」寛元元年六月十六日条「深沢村建立一字精舎、安八丈餘阿弥陀佛…」と引用し、加えて「私云、安八丈餘ノ阿弥陀佛トハ木像也、金銅ノ像ニハ非ス」とし、以下に他の文献を加えつつ考証をおこなっている。このように乙本上巻は『縁起』編述にあたり先行して根拠史料の集積と考証を試み清書したものの

であるといえ、まさしく「大仏縁起附録」としての性格を看取できよう。

次に、甲本（上・下巻）と乙本（中・下巻）の記述様式と記載内容を見ておく。

両本の記述様式は、ともに外題が「相州鎌倉大佛縁起卷上」「相州鎌倉大佛縁起卷下」であり、一丁八行をもって記し、若干一行の字数に変動があるもののほぼ同じ体裁で記している。縁起の内容についても両本同様である。ただ、乙本には漢字にルビが付されるところにのみ甲本との違いがみられる。

このように両本はほぼ同一諸点が認められることから、その作成もほぼ同時期と推察されるが、先述したように乙本上巻に「于時享保十九年甲寅歲養國清書之」とあることから、乙本上巻が先に作成され、これをもとに浄書本甲本が作成されたと考えられよう。

次に記述内容の時間的な幅について見ておく。両本記載内容を大別すれば、甲本上巻と乙本中巻は、大仏造像以前の聖武帝の天平九（七三七）年三月、染屋太郎時忠を奉行とし行基菩薩を開山に清浄泉寺草創から筆を起し明応の大地震頃までを収める。甲本下巻と乙本下巻は祐天上人の大仏再建発願から以降の記事を収める構成となっている。

ところで、『縁起』成立時期を考えるにあたっては、記事内容の時間的下限を見極めておく必要がある。ここで甲本下巻と乙本下巻にみえる最下限の記載について注目しておくと、下限

期は養国が大仏及び大仏殿修復を企図し江戸御府内勧進の「官許」を得たとの記述である。これが史料的に確認のできる最下限である。

養国上人は大仏の鑄掛修復を企図しその費用捻出を御府内托鉢七ヶ年御免の勧進に頼るべく寺社奉行所に嘆願した。この申請に対し寺社奉行所は享保十九（一七三四）年五月二十八日「托鉢」行動として認めている（『大仏鑄掛修復托鉢願之日鑑』へ高德院所蔵）以下「日鑑」と略称）。『縁起』がいう「官許」の記述はこの「托鉢」許可を指すものと思われるがこの事実が『縁起』に挿入されている。つまり本『縁起』作成時期と縁起内容の下限時に矛盾はないのである。

なお、『縁起』が記す「官許」について付言しておく、養国の企図した「御府内托鉢七ヶ年御免」は寺社奉行所の許可を要すると考えての嘆願であったが、実は「托鉢」は沙門にとつては当然の行為であるとする寺社奉行所の見解から、当該嘆願は官許を要しないものとして処理された。大仏の托鉢勧進は法制上からいえば許可対象外であったのである。縁起ではこの峻別をせずあえて「官許」として記述しているのは、幕府權威を付加して縁起を作成しようとする作成者側の意志がはたらいっていたと見るべきであろう。

野嶋泰祐と養国上人

『縁起』作成の本願主である野嶋泰祐と撰者養国上人はともに江戸期鎌倉大仏の復興にあたってきわめて重要な人物であるが、出自や事績などに関しては不明な部分が多い。『縁起』『日鑑』『公儀差出書類』『大仏高德院略記(文化四年)』(以下『略記』と略称)などにより若干知れることを述べておく。

俗名野嶋新左衛門(泰祐)は江戸浅草の商人。増上寺祐天大僧正の鎌倉大仏殿再興・常念仏起立の発願に志をよせこれに喜捨し、その善業により高德院という法名を授けられ、開白された常念仏の殿宇を「高德院」と号した。しかし、正徳四(一七一四)年頃泰祐は遠島に処せられてしまう。新井白石の『折たく柴の記』正徳四年の記事として、野嶋新左衛門という商人が金銀改鑄と旧貨交換の方法に関して妨害する発言をし、その処罰のあったことが見え、これが遠島の理由であろう。これによって折角はじまった大仏高德院の常念仏は資糧なく断絶の危機となるが、泰祐は享保六(一七二一)年赦免となって浅草に帰住、剃髪を願うものの論されて家業を興し、再び常念仏復興に邁進した。

この頃、泰祐は養国と親子の縁を結んだようで、享保十八年養国を高徳院住持に推挙して入院させ、また『縁起』の作成を促し享保二十年正月に完成させるなど、江戸期大仏復興の基盤づくりを努めた。寛保三(一七四三)年四月十日江戸にて終命。

養国の生年・生地、得度時期などは不詳。「縁起」によると師は誠蓮社諦誉上人不虛円竜大和尚。諦誉は増上寺祐天・詮察・演誉の三代九年の間知事として勤役し、のちに岩槻の浄国寺住持となつた僧である。

享保十五（一七三〇）年、鎌倉光明寺観徹と諦誉が増上寺宿坊で親しく面談したことが『日鑑』に見える。話題は諦誉が大仏に関し苦慮していること、それを光明寺観徹が承知していることを語っているので、諦誉にも大仏復興の関心があつたものと思える。弟子の養国も大仏に關しては不思議な縁を感じていたようで、「拙僧不思議縁ニ而生を此辺に得、少年より此大仏ニ御縁を結び、出家之後祐天大僧正建立ニ付、我其時ニ大仏再興之志願發りき」とあり、養国自身と大仏の関わり、そして大仏復興発願は若い頃からの因縁に起因していると回想している。これによると養国の生地は鎌倉近辺ということになる。

養国は、親子の關係を結んだ野嶋泰祐の強い推挙により、享保十八年三月朔日に高德院住職として入院した。一代限りではあれ金入袈裟着用を許容されての入院であつた。

入院直後、養国は大仏の荒廢を目の当たりにして直ちに大仏の修補を發願し、早速増上寺や光明寺、あるいは野嶋泰祐の協力を仰ぐべく奔走を開始するとともに、翌享保十九年には『縁起』編述のため史料集「大仏縁起附録」（乙本上巻）を短日のうちに成し、同年五月には寺社

奉行所宛に「江戸市中七ヶ年托鉢御免願」の申請に及ぶなど、まさしく東奔西走の活動であった（『日鑑』）。ただ、「江戸市中七ヶ年托鉢御免願」は許可対象外として処理され、托鉢をもつて費用の捻出をおこなうことになるが、この間白毫寄進、大仏御頭の戸口・螺髪鑄掛・大仏蓮花座鑄掛の完成、建長寺より大仏唐銅扉の返還寄進などと相次ぎ、漸く大仏の鑄掛修覆を順調に進行させて元文二（一七三七）年七月には大仏開眼供養を修した。その後も養国の活動は、江戸止宿所・勸化所の開設、托鉢勸進の継続、さらに常説法所の設置へと企図を伸張させた。しかし江戸市中での常説法所開設は増上寺尊誉了般大僧正の強い反対にあい、元文五年には江戸勸化所を引き払うこととなって実現を見ずに終わった。

寛保三（一七四三）年三月八日高德院廊下の屋上から失火し、一字残らず焼失する不幸、さらに同四月には野嶋泰祐の死去と不幸が相次いだ。ここでも養国は力を尽くし仏堂・住居の再建を果たしたが、高德院常念仏は以降中絶した。

この後、宝暦四（一七五四）年に隠居、鎌倉を離れ田戸（横須賀市公郷）聖徳寺に転住して、ここでも同寺再建の企てをなすが、宝暦十一年八月二十九日田戸にて命終（『略記』）。なお、聖徳寺「過去帳」には当寺九世「浄蓮社薰誉上人到阿養國圓宿和尚」とし、没年「寶暦十一辛巳年八月廿八日」の示寂が記されている。

『縁起』の成立事情

養国が大仏に入院したのは享保十八（一七三三）年三月朔日であった。『日鑑』によると養国がまず行ったのは、大仏の腹内にあった鳥類の糞・古石塔などの掃除と鳥類の進入防止のため扉口の籠造であった。この作業を通して「我正ニ大願を發し大佛修補之願を初む」と見え、養国は大仏修補を本格的に志すことになった。しかし、修補に取り掛かるうにも「縁起・記録會而無之」ありさまであったと記している。また、「里人相尋候へとも慥なる事無之、依之東鑑等国史之類を相尋、所々人々国々色々縁を求て相尋申候」ともあるので、養国は大仏修補にあたって「縁起」を欠くべからざるものとして意識している様子が窺える。

大仏復興はそもそも祐天上人の発願から増上寺や光明寺の関心事であった。養国の当面の眼目は破損著しい大仏の鑄掛修覆にあった。そこで、先ず本山である光明寺や増上寺の賛同を得ることから行動を開始しているが、その背景には費用捻出のひとつの方途として江戸府内での勧進所開設があったからである。江戸府内での勧進所開設には幕府の許可が必要で、その申請手続き上本山寺院の同意を要したためである。

幕府への申請にあたって大仏の由緒、即ち『縁起』を整えておく必要があるがここに生じたものと思われる。さらに、勧進所開設の理由として鑄掛修覆ばかりではなく、「大仏殿再興」までを

視野に入れて願書作成がよいとする増上寺の意見もあり、幕府許可を得る鑄掛修覆と大仏殿再建という大事業にはなんとしても遠因正當なる『縁起』が必要であったのであろう。

養国は入院まもなくして『縁起』編纂のための史料収集に着手したと思われる。享保十八年極月二十八日条の『日鑑』には「今日、大佛鑄懸修覆・御堂建立之願書并大佛之御長ヶ書付、東鑑等之古記、里人傳語之趣、増上寺會下老僧的信和尚所持大和國飛鳥寺之縁起、不殘壹卷に書写し本山へ相納候」と見え、幕府提出の願書とその願書作成にあたっての蒐集史料が書写されて増上寺へ提出されているので、既にこの頃までにはある程度史料収集が進んでいたと見られる。

このような経過の中で「乙本上巻」（「于時享保十九年甲寅歲養国清書之」）が先にできあがった。そして、この「乙本上巻」にもとづき「乙本中・下巻」と「甲本」（上・下巻）の『縁起』が野嶋泰祐の所望によつて享保二十年正月に浄書され成立をみたと考えられよう。

幕府宛願書提出に端を發して作成された『縁起』は、その後も大仏復興事業に寄与することになるはずであった。前述したように、元文二（一七三七）年大仏の修覆は一応完成したが、養国の大仏再興の勸進活動は、江戸止宿所・勧化所を開設し、その後も托鉢を継続しつつさらに常説法所の設置へと企図を伸張した。しかし江戸市中での常説法所開設は増上寺尊誉了般大

僧正の強い反対にあつて実現を見ずに終わることになるが、この常説法所開設や托鉢勸進活動にあたつてすでに作成されていた『縁起』が役立つはずであつたことが『日鑑』に見える。

元文五年五月十四日条には「托鉢勸化ひろめとして大佛縁起并佛書講釈仕、有信之男女相勤^勸メ建立之助縁ニ仕度」とある。すなわち、『縁起』は単に由緒を誇らしく表示して願書作成時の重みを増す活用面ばかりではなく、このような勸進にあわせて活用されるべき側面をあわせ有していたことが窺える。

『縁起』の構成内容と特色

「縁起」とは元来仏教上の用語であるが、事物・現象の存在理由や生成過程を述べ記したものである。こうした縁起は古来より数多く作成されていた。櫻井徳太郎氏（日本思想大系『神社縁起』）は縁起を、古縁起・釈経縁起・靈験縁起・垂迹縁起・寺院縁起・神社縁起・絵巻縁起・靈山縁起、などの諸類型を設定され理解されているが、『縁起』は以下に述べるとおり、いくつかの縁起類に影響され成立をみている。

ところで、『縁起』は前述したとおり養国の周到な史料蒐集をもとに享保末期に編まれたものである。『縁起』の内容を見てみても、史料、伝聞、などをまじえた記述となっており、しかも養国自身の考証に裏付けされ、いわば史資料に則し整合性をもった展開構成となっている。

ことがわかる。このことがこの『縁起』のひとつの特色といえるかもしれない。また、鎌倉大仏に関する史資料が決して多くない中で『縁起』は寺史の欠を補う貴重な資料を提供しているのも注目すべき点である。

さて、『縁起』内容を少し分析的にみると他にいくつかの特色が指摘できる。

ひとつは、この『縁起』作成に影響を与えるような先行の縁起類の存在、もうひとつは『縁起』を組み立てた基本的な考え方、あるいは『縁起』が訴えたい真意とでもいうべき思想の存在である。

『縁起』に影響を与えた先行する「縁起」は「清浄泉寺建立序次之記―最信之記」（以下「序次記」と略称）と恐らく「東大寺大仏縁起」であろう。

「序次記」は先述した『縁起』乙本上巻に抜粋の一部が収まっている。従って「序次記」は享保頃には現存していたと考えられるが、貞享二（一六八五）年刊の『新編鎌倉志』にはこの史料について全く触れていない。『新編相模国風土記稿』には「所蔵に、正嘉二年九月、勝長寿院別当、権少都最信が記せし、清浄泉寺建立序次之記の写曰」とあってその史料を引用しているの、この頃には存在していたようである。しかし、今日その所在は不明で（「序次記」は銅板。元祿の頃には大仏の胎内にあったと、『縁起』乙本上巻に見える。）、『縁起』乙本上巻

と『新編相模国風土記稿』によってその内容を窺うのみであるので、はたして正嘉二（一二五八）年の成立の史料と見てよいのかなど厳密な史料批判ができかねる甚だ不可解な史料である。ただ、「序次記」は、享保期の『縁起』作成に当たって大いに引用されたことは、『新編相模国風土記稿』の引用記事とを見比べれば一目瞭然であろう。特に『縁起』上巻の聖武帝による清浄寺創建の書き出しから、時忠の奉行、四哲の関与、頼朝の上洛と大仏造営発願、稲多野局の発願と鶴岡八幡宮本地仏としての建立など、『縁起』上巻の前半の骨子は全くこの「序次記」に拠っている。

さて、次に「東大寺縁起」とのかかわりについて見ておこう。ここでその詳細を論じることができないが、『縁起』と「東大寺縁起」に共通する事項をいくつか抽出し以下に示しておこう。

まず、『縁起』から

①大仏建立以前の靈地である深沢里には清浄泉寺という寺があり、その清浄泉寺は聖武帝の建立にかかわる東国の惣国分寺であった。この国分寺は四聖（聖武帝・行基菩薩・良弁僧正・菩提僧正）同心の発願であった、とする。

②清浄泉寺はもともと靈地である。忽然と真人ひとり黒き馬に騎て富士の巔を降り馬を深沢

の嶺上にとどめ、ここで清泉を汲み馬口に漱いだ。この靈地に清淨泉寺が建立された、とする。

③ 稲多野局は鶴岡八幡宮に大仏建立の祈願をしその大願を果たすが、この大仏は「鶴岡八幡太神の御本地無量寿の大仏」であつた、とする。

④ 八幡神の本地は無量寿如来である。されば鎌倉大仏の鎮守は「伊勢神明の別宮」として社殿を伽藍の傍に祀つた、とある。

この四項について「東大寺縁起」と比較してみると、

①は、「東大寺縁起」(『統群書類従 卷七九三』以下同)に、東大寺は「四聖建立奇特奇麗之精舎」とある。『縁起』はこの四聖傳承を引いたものと思われる。

②は、「東大寺縁起」に「上宮太子遊觀楓野宿御泉河之時：吾薨後百廿餘年、重受生於釋氏可造大寺大佛云々」とある。『縁起』はこうした聖徳太子の遊行傳承と東大寺大仏建立傳承を取り入れているように見える。

③は、「東大寺縁起」に大仏造営と伽藍建立に係わつて「八幡大菩薩雙鎮座於遮那尊之他境^(地)」とあり、八幡神と東大寺大仏は本地仏の關係で祭祀されていると解されよう。『縁起』はこの本地垂迹思想をそのまま鎌倉大仏と鶴岡八幡の關係に当てはめていたのではないだろうか。こ

の他にも宇佐八幡の託宣などの記事もあって東大寺建立には八幡神が浅からず関与している。

④は、「東大寺縁起」に伊勢大神との係わりが多く記される。帝の靈夢中示現、影向、託宣などであるが、「天照大神示 聖武天皇云、我垂迹於厨院之邊、…依之當寺食堂北邊就建立玉殿被奉崇靈神尊之竈殿矣」は、鎌倉大仏の伊勢別宮の祭祀と関わりがありそうである。

このようにいくつかの例示ではあるが、江戸時代成立の『縁起』は「東大寺縁起」との類似性からみて東大寺のそれをおおいに参考としたものではないかと思われるのである。ここでは両者の類似性を指摘するにとどめるが、推論を許されれば、鎌倉大仏（阿弥陀如来）は鎌倉鶴岡八幡の本地仏としてそもそも建立の意図があったのではないか、という点である。単に「東大寺縁起」に仮託しただけではなく、鎌倉鶴岡八幡と鎌倉大仏という本地垂迹伝承を内包しつつ『縁起』の作成された可能性を考えるべきかも知れない。

さて、次に『縁起』のもうひとつの特色についてふれておこう。すなわち鎌倉大仏と女性との係わりに多く筆を割いている点である。因みに鎌倉大仏と女性との係わりを列記してみると、

『縁起』上巻

・東大寺と諸国分寺建立の権輿は聖武帝、行基、良弁、菩提の四聖同心の発願にして光明皇后の勸発。

・建久六年三月十一日、東大寺大仏殿再建落慶法要に頼朝と北方（政子）、若君、稲多野局が従う。

・頼朝東国に大仏を建立せんことを誓う。頼朝没後、稲多野、頼朝の宿願成就のため八幡宮に希う。

・稲多野、二位の夫人に暇乞いして深沢の里国分寺の傍らに庵を建て、櫓を売り・糊を練って大仏建立の資糧を集め、その値を庵の後ろの岩窟に納め、その上に八幡宮を祀る。二位の夫人これに助縁す。

・稲多局、鶴岡八幡の本地無量寿仏の大仏を鑄奉ることを発願す。

・建長五年五月二十五日、稲多局薨す。往生の時、奇瑞あらわれ仏菩薩来迎す。

『縁起』下巻

・綱吉の母桂昌院・綱吉の女鶴姫は大仏殿再興の志願あり。

・野嶋新左衛門泰祐の妻（浄泉院）の勧めにより新左衛門が祐天上人の大仏寺坊建立費を寄進。

・野嶋氏遠流により、常念仏相続の資糧なく、松平伊賀守室光寿院殿・内藤能登守室光安院殿が寄進す。

・家宣の側室月光院、祐天を頼り剃髪、櫛笄等大仏胎内に納入。

・家宣の正室天英院、祐天に帰依し浄土宗に改宗、剪髪を大仏に奉納。

・綱吉の側室瑞春院・寿光院、家宣の側室法心院・蓮（尊）乘院なども剪髪を大仏に奉納。

・武蔵国江戸三十間堀の住人、内海吉兵衛祖母妙珠法女、大仏を夢中に拝して、白銀をもって大仏の白毫相を再興す。

などに見えるように『縁起』は鎌倉大仏と女性との係わりを多く描き込んでいた。このことは『縁起』自身の中でも「是いかなる因縁にてや、此御仏建立の発願主も皆女子にある事、不思議の事にや覚ゆれ」と記すように、この『縁起』自体が女性の信仰をモチーフに展開していることを如実に示すものであろう。

こうした特徴は、『縁起』編述者である養国の宗教的教義に係わっているのかも知れない。養国は前述の通り浄土宗僧侶である。『法華経』『大無量寿経』など浄土教の諸経典は、阿弥陀仏が女人の救済を本願としたと説き、浄土宗を中心に「女人往生」を積極的に標榜した。こうした浄土教の教義思想の延長に『縁起』作成がなされたものかと思われる。特に江戸時代には『女人往生伝』などが多刊されこの思想の喧伝にも影響を受けているかも知れない。『縁起』末文は阿弥陀如来の大仏が多く女人との因縁がある理由を「…皆仏の方便力にて、下根愚痴の女人こときの衆生をも、もろさすすくひ給ふ大悲の御本願を顕はさんために、女子に発起を成

しめ給ふとかや」と結んでいる。養国が史資料を尽くし展開してきた『縁起』の本旨がここに窺えるように思われるのである。

『大仏高德院略記』について

袋綴四ツ目綴。墨付き十九丁。縦二七・〇cm×横一九・二cm。表紙貼題箋は「大佛高德院略記」以下『略記』と略称）とあり、また表紙右肩に朱書きで「明治十四年五月 野鳥ヨリ受取」とある。

作成期は本文中に見える「文化四年十一月」と記す関係史料の年代からしてこの時の成立と見てよいだろう。

『略記』は表題が示すように概略の縁起として作成されたものだが、その出典は勿論『縁起』の甲本・乙本である。しかし、『縁起』が享保二十（一七三五）年までの記述であるのに対して、この『略記』は聖武帝の代の清浄泉寺草創から文化四年（一八〇七）頃までの記事を含んでいる点に大きな違がある。つまり、享保二十年以降文化四年頃までの大仏の縁起を新たに追加しているのである。例えば、寛保三（一七四三）年に高德院一字の消失したこと、野嶋泰祐の没年、養国上人の示寂年などもこの『略記』に見えるし、養国上人以降の高徳院歴住なども留めている。また、大仏にかかわる瑞奇譚や大仏鑄造に係わった鑄物師の伝承なども収めてい

る。

ところで『略記』には寛政七（一七九五）年の事として「西上総矢名村金谷の里大野五郎右衛門」の先祖が大仏鑄造に係わったとの伝承を記載している。この伝承は『縁起』には無く、現在『略記』がその初出であると思われるので、少なくとも寛政七年以降に付加したことが知られる。

なお、千葉県木更津市に鑄物師の系譜を有する大野家があつて、同家には中世文書を含む「大野家文書」三十二点余（木更津市指定文化財）が伝蔵する。佐藤博信氏はこれら文書の分析を通して、大野家と鎌倉大仏の係わりが次第に強調されるようになった時期を近世中期以降と推定されている（『上総鑄物師 大野家文書調査報告書』木更津市教育委員会 平成六年）。『略記』に「寛政七巳年夏戴簪代、今の五郎右衛門妻大佛に参詣して住持へ物語に、私先祖此尊像を鑄奉り、爾来式十四代血脈相續き、代々長命にて分家三十六軒是あり、私方本家にてうんぐわを鑄立候斗を業とし：偏ニ此尊像の御守と有かたき御事ニ候」と、大野家側から大仏鑄造伝承をもたらしている様子が窺えて興味深い。

ともあれ『略記』は、鎌倉大仏に関する江戸期の史資料の決して豊かではないなかで、その欠を補うとともに当時の大仏信仰などを考える際の価値ある史資料といえよう。

鎌倉大仏のあゆみ

——大仏はこうして鎮座された

鎌倉大仏由来

佐藤密雄

佐藤行信

凡例

・佐藤密雄「鎌倉大仏のあゆみ」は、『大法輪』（第四四卷一号 一九七七年一月）に発表したものを転載した。

・佐藤行信「鎌倉大仏由来」は、『芸術浄土』（三号 一九七七年四月）に発表したものを転載した。

・転載にあたって、発表時点の著者肩書を世代住持に改めたほか、あきらかに誤植と思われる箇所を訂正にとどめた。また、『大法輪』及び『芸術浄土』両誌上に掲載の写真は省略した。

鎌倉大仏のあゆみ

——大仏はこうして鎮座された

鎌倉大佛殿高德院第十三世住職 佐藤 密雄

一 大仏殿の崩壊

『太平記』十三卷に「足利殿東国下向の事、付、時行滅亡の事」という記事がある。その中の一節——

我身（北条時行）は鎌倉にあり乍ら、名越式部大輔を大将として、東海・東山両道を押して攻め上る。其勢三万余騎なり。八月三日鎌倉を立たんとしける夜、俄かに大風吹いて、家々を吹き破りける間、天災を遁れんとて、大仏殿の中へ逃れ入り、おのおの、身を縮めて居たりけるに、大仏殿の棟梁（むね・はり）、微塵に折れて、倒れける間、其の内にあつまり居たる軍兵共五百余人、一人も残らず、おし圧におうて

死にけり。戦場に趣く門出に、かかる天災に逢う。此の軍はかばかしからじと、さ
さやきけれ共、さて有るべき事ならねば、重ねて日を取り、名越式部大輔は、鎌倉
を立ちて、夜に日に継で路を急ぎける間、八月七日、前陣は已に遠江、佐夜の中山
を越えけり。

元弘三年（一三三三）五月に新田義貞が稲村ヶ崎から鎌倉へ攻め込んだ。然し十二月
には早くも、足利直義が鎌倉の支配者となって、護良親王を監視していた。又それから
二年目の建武二年（一三三五）には、亡んだ北条高時の子、相模次郎時行が、今度は官
軍方となって鎌倉へ討ち入った。烈しい源氏（足利）と平氏（北条）との戦いの繰返し
であるが、この時、足利直義は護良親王を弑して西走した。直義の西走は七月であるが、
早くも、九月には駿河で兄の尊氏と合体、反転して鎌倉へ攻め下ってきた。そこで、鎌
倉の北条時行は、この足利勢を東海道に迎撃せんと、名越式部を將として三万の大軍を
出すが、冒頭の『太平記』の記事は、その出陣の夜のことである。時に旧暦の八月三日、
秋台風のシーズンであった。その後、佐夜の中山まで進んだ名越式部の軍は、一度は足
利軍を破ったが、箱根で破れ、鎌倉にいた北条時行は、大御堂で、父高時の最期と同様

に、大名四十三人と自害し果てたと伝えられる。

この時の大仏殿崩壊は、金銅大仏を作って七十二年目のこと、五百人の軍勢が、その中に嵐を避けたというから、壮大な大仏殿であったに違いない。今、高德院境内に、ささやかな慰霊塔がある。

二 大仏造立の勸進僧

鎌倉大仏は初め木造で造られた。これも壮大なものであったらしい。仁治三年（一二三二）八月、源親行は京都を出て鎌倉を訪れた。その日記である『東関紀行』に、木像の大仏像をまつた大仏殿を、工事中であったが、参拝した記事がある。「仏像をつくり、堂舎を建てたり。その功はすでに三が二（ $\frac{2}{3}$ ）に及ぶ。烏瑟（頭頂）高く半天の雲に入り、白毫あらたにみがきて満月の光を耀やかす。仏はすなわち兩三年の功すみやかになり、堂は十二楼のかまえ、望むにたかし。彼の東大寺の本尊は、聖武天皇の製作、金銅十丈の盧舎那仏なり。天竺・震旦にもたぐいなき仏像とこそ聞ゆれ。此の阿弥陀仏は、八丈の御長なれば、かの大仏のなかばよりすすめり云云」と述べている。御長十丈とか八丈とかいうのは、その仏が立っての背丈であって、造られたのは、その坐像である。

奈良の毘盧舎那仏も、鎌倉の阿弥陀仏も、共に坐像である。親行は、坐像としては五丈、四丈と見たわけである。

さて、この『東関紀行』の筆者の見たのは、前記の『太平記』に出る大仏殿以前の、木像の大仏と仏殿との制作中のことであつた。

そこで、初めに木造、次に金銅で大仏を造つたのは浄光（定光）という勸進僧であり、念仏聖である。聖とは民間の乞食僧で、僧位僧官あるものではなかつた。浄光聖は、『東関紀行』には遠江国の出身というも、出生に関してはそれだけで、それ以上のことは何も判つていないし、僧伝に入る人物でもなかつた。頼朝が奈良東大寺の復興落成式に参列したことは有名だが、その復興落成をなしたとげた勸進僧は重源ちゆうげんと呼ばれる念仏聖であつた。浄光はその弟子であるとも伝えるが、それは伝説のみで何の記録もない。然し、重源は東大寺復興のために、全国に勸進して喜捨を求め、諸国を廻つて材木を求め、自分で車を引いて回つたというから、浄光も、それを手伝つた僧の一人であつたかも知れない。それは、浄光が勸進の官許を得るために、政府に提出した口上書には、重源の仕方に学んだものと考えられるものがあるからである。東海・東北の勸進を終えた浄光が、

重ねて北陸・西海への勧進の許可を願ひ出た文書がある。それには、日本の男女数四十五億八万九千六百五十九人（十万を一億とする）とするが、これは行基菩薩の計算である。浄光は、それをそのまま用いて、一人につき一文銭を得て、四万五百八十九貫に得たいとしている。従つてこれは、東大寺の勧進に用いる人口数で、このような行基以来の計算の仕方は、重源に学んだと考えられるからである。それにしても、聖武天皇の命によつて、東大寺大仏の勧進、即ち募金をした行基も、公式に許可された僧でなく、私に僧となつたもの、即ち野僧が起用されたのであつたし、源平の戦いで、平重衡が焼いた東大寺仏殿と仏像との復興の院宣を受けた重源も、日本仏教史上稀有の名僧であるが、もともとは生国も不明の念仏聖であつた。ただ、野僧の中で知られた、荒寺を修覆する普請好きの僧であつたにすぎない。鎌倉大仏を、木造で作り、それから金銅の像に造り直した浄光も、『東関紀行』が「遠江の人」というだけで、生処も死所も判然としないし、名も浄光か定光か一定しない。当時の、流浪する念仏聖であつた。官から許可を得た正式の僧は、官給で僧位を有するが、聖は師について出家するが、官の認めた僧でなく、僧都とか僧正とかの僧位もなく、住寺のあるう筈もない。民家に乞うて泊るか野宿する

かして、説教し念仏の集いをして民衆から喜捨を受けて生きた。行基の如く農民に役立つ事業をなすか、大仏造立の如き企てをなし、民間のスポンサーを求め、自分もそれで生きるものであつた。

さて、行基にしても、重源にしても、浄光にしても、苦勞して勸進し、資金資材を集めるが、然し大仏殿が出来たとて、彼が導師となつて開眼供養するわけでもなく、別当職になれるのでもなかつた。然し、仏事をなしとげ、庶民に念仏を授けることが、聖ひじりの聖たる所以でもあつた。浄光は、鎌倉の大仏を造つたが、その後の旅先も死処も判らない。或いは現在も未完成のままの鎌倉大仏であるから完成資金を集めつつ、北か南かの国のはてで生を終つたのであろうか。

三 木造と金銅との大仏

年次は不明であるが、浄光が鎌倉に入った時のスポンサーは極楽寺の忍性菩薩良観で、その好意で住居を得た。恐らく、大仏造立の志を述べての結果であつた。此頃、浄土宗の三祖記主禪師が千葉から来て鎌倉に入ったが、これはまた、浄光に助けられて定住して浄土念仏を説くことを得た。日蓮上人が幕府に對して、真言（忍性）と念仏（記主）

と大仏信仰とを難ずる文を遣されたのも、この状況から肯ける。頼朝の侍女であった稲多野局が生存していて、浄光の勧進に献身の協力を捧げたとも伝えられる。鎌倉大仏を造ったのは、そのような念仏聖であった。

鎌倉大仏が阿弥陀仏であることは、以上のことから、念仏聖の造った阿弥陀仏であることが知られ、毘盧舎那仏でも釈迦如来でもなかった。又浄光が延応元年（一二三九）の政府への言上書にも「念ずるところは西方極樂の教主なり」としている。

さて浄光は、先きに述べたように、先ず東海、東山、山陽、山陰の諸道を第一次に、つづいて第二次として北陸、西海にも政府の下知を得て、それこそ「尊きも卑しきも、出家にも在家にも」勧進して、師とも見られる重源上人に倣って募金の行脚をした。

暦仁元年（一二三八）三月二十三日の鎌倉は、雨降り風烈しく庭木の吹き折れる日であったが、この日「相模国深沢の里の大仏堂の事始めあり」と、幕府の記録『吾妻鏡』に記される。即ち起工式である。深沢の里は、今日の鎌倉市長谷である。事始めは御堂のことであろうが、御堂にまつる大像も作られつつあった。すなわち、事始めがあつてから二ヶ月目の五月二十八日に、大仏像の御頭を上げた。上げたとあるから、御顔の部

分を別に彫刻して、すでに出来上っていた胴体の上部に取りつけたのである。

鎌倉幕府も、民間の聖僧ひじりの事業とはいえ、関心がなかったわけでもあるまいが、財政的援助が出来なかったようである。然し、事始めから三年すぎて、仁治二年（一二四二）四月に、囚人の逃亡事件があった。囚人の逃亡は預人の不注意から生じた事なので、幕府は預人から過怠料を取って、これを「新大仏造営料」に寄進させることにした。新田太郎政義に三千疋、毛呂五郎入道蓮光に五千疋を、八月中に弁償するように命じているが、さて、文字通りに実行されたかどうかは不明であるが、とも角、幕府も関心を寄せていたのは事実である。とくに此の年の二月に鎌倉に大地震があった。地震は幕府にとって凶兆であった。先年に地震があつて、その直後に和田義盛の乱がつづいたからである。そこで、幕府の命もあつて、三月に御堂の上棟式をしたのだと考えられ、囚人逃亡の過怠料の寄附は、その上棟式の祝儀とも見られるのである。

先きに記した『東関紀行』の記事は、上棟式の翌年の情景で、その時には、工事は三分の二迄進んでいたとするが、上棟式から三年すぎた寛元元年（一二四四）の六月十六日に落慶供養をなした。『吾妻鏡』の記事に「深沢村に一字を建立す。八丈余の阿弥陀仏

像を安じて、今日供養を展ぶ。導師は僧正良信、讚衆は十人である」と記している。僧正良信は頼朝の建てた勝長寿院の主である。『東関紀行』が「十二楼の構え、仰ぐに高し」という程の大殿堂の落成式に讚衆（出勤僧）が十人とは、まことにつまましい式典であった。然し、ともかく民間事業として、浄光が暦仁元年に初めてから六年目で落成して、幕府が供養会をなしたといえる。

さて、木造の大仏の落成式後九年目の建長四年（一二五二）八月十七日に「今日、彼岸の第七日に当り、深沢の里にて、金銅八丈の釈迦如来像を鑄始め奉る」と『吾妻鏡』は記す。釈迦如来像は阿弥陀如来像の誤記。さて、そうすると、前記の木造大仏はどうなったのか。木造大仏落成供養の後、宝治元年（一二四七）正月に、由比浜に赤潮が押し寄せ凶兆を思わせたし、三浦党の騒ぎもあったが、九月一日に大風があつて、仏閣や人家の多くが顛倒破損したという。この風災に、巨大建築の大仏殿も倒壊し仏像も崩れたか、大破損を免れなかったと考えねばなるまい。そこで、浄光は、金銅の大仏に作り変えようと考えたのであろうか。或は説をなす人は、先きの木造大仏は金銅大仏の原型であつて、建長の金銅仏鑄造は予定の行動とする。後者の説も有力である。然し、鑄造

の専門家によると、現在の金銅仏は木造の原型ではないという。恐らく、浄光は、木造大仏の風雨に弱いことから、また、常に東大寺の金銅大仏に対して「新大仏」と自称しているところから、金銅大仏を心掛けていて、勸進をすすめて、ついに所期の鑄造にこぎつけたものと見るのが正しいようである。

四 幕府と鎌倉大仏

鎌倉大仏は建長四年に鑄始めてから、その後何年で完成したかは不明である。然し、仏体と仏殿は数年で完成したと見られる。尤も、それは、蓮台も光背も未完の仏像ではあった。鑄造開始後三年目に「人倫売買銭事」という事件があった。人身売買の税金の事であろうが、これが大仏鑄造事業に寄進されることになった。資金不足等で、はかどらなかつた事業への幕府の応援であつたと見られる。但し浄光は、国々の運上（取立？）は煩しいと断つたので、幕府は、地頭の沙汰として送集すべき下知を下したとする。幕府が集めてくれる意味か。ともかく、幕府も完成を後援すべく努力はしたといえるが、何しろ民間の勸進僧の事業であつて、幕府が直接の事業ではない。硬骨で不屈の僧浄光なればこそ出来たといえる。但し、上記の如く光背や蓮台は出来なかつたが、仏体は鑄

物のことであるから、長くかかることはゆるさないであろうから、鑄始めて両三年には出来たと考えられる。鎌倉より大きい東大寺大仏は約三年で鑄込が終っている。

建長四年から七十五年過ぎた嘉暦三年（一三二八）の金沢貞顕書状に「関東大仏造營料唐船事」というのがあつて、当時の宋に貿易船を出して、その利益を大仏造營費にあつてよとしたことが判るが、これは光背、蓮台等の完成資金が、その頃なお求められていたことに依るものである。然し光背も蓮台もついに出来なかつた。今日も無いのである。

本文の冒頭に記した『太平記』の一文、相模次郎時行の軍勢五百人が、大仏殿に嵐を避け、崩壊する仏殿とともに死んだのは、建武二年（一三三五）で、金銅の大仏を鑄始めた建長四年から八十五年目のことであつた。先きに触れたように、五百人の軍勢の入つた大仏殿は壮大なものであつたに違いない。然し、災害には、もろかつた。鎌倉では、康元元年（一二五六）八月、それは金銅大仏を鑄始めてから五年目のことであるが暴風があり、また七十三年目の元享三年（一三二三）の五月に大地震があつたが、その間にも十数度の天災地変があつたとも伝えられる。その度に損害を受けたようである。伊豆

から鎌倉にかけての地帯は、今日でも、日本有数の地震多発地帯であるし、相模湾は台風の通路でもある。建武元年の『太平記』に見る大仏殿破壊は、間もなく再建されたが、その後応安二年（一三六九）の九月三日の大風で建物が転倒した。大仏殿のある深沢の里は、鎌倉の西南の長谷はせという谷戸の入口、相模湾に南面し、台風時には、さえぎるものなく、海上からの風に直面する。高樓の木造建築のこと、地震と大風には弱かった。然し、この時も仏殿を修復したのであろう。その後のこと、『鎌倉大日記』によると明応四年（一四九五）八月十五日には、「大地震洪水あり、鎌倉由比ヶ浜に海水到ること千度。檀水の勢いは大仏殿に入り、堂舎を破る。溺死する人二百余人なり」とある。寺伝によると、此の時以後、大仏は露坐となったのである。既に鎌倉は政権の中心でなく、勸進をなしても、それに応ずる経済的な力はなかったからと見られる。

江戸時代に入って、大仏殿の関係者は屢屢、大仏殿の復旧を願ったが、ついに成らなかつたし、やがて無住の状態が元禄まで続いた。明治十三年に、仏殿の復興に関して、最後までもいべき努力が払われた。六角堂形の大仏殿の設計をなし、参万六千余円の予算で募金に取りかかった。太政大臣三条実美以下の要人、清水万之助以下の建築業者、

団十郎以下の役者、福地桜痴以下の文化人等の壱百余名の署名捺印の寄附帳がある。此の外にも、念仏一唱一厘の寄附を集めるパンフレットもあり、三井銀行と特別契約書を作つて、東京市民が大小にかかわらず、寄附金を振込む方策も立てた。これも、銀行業史に珍しい契約書として、今も高德院に蔵されている。

然し、集まつた金は大仏殿を建てるには程遠かつた。然し、当時は境内地は全く失われていて、土地といえば細い参道と大仏像坐下のみとなつていたので、此資金で参道の両側と仏像周辺の土地を買戻して、大仏像の脇に僧の常住する僧庵を建てるに止まつた。但し、それは全体で千坪に満たないものであつた。今日から考えれば、四万円にみたない金が集まらなかつた。ちなみに太政大臣三条実美の寄附署名は金三十円、他の参議等々は二十円、文化人・芸能人は五円から三円で、いずれも署名捺印しているので、納入されたと考えられる。現在の境内は明治十三年以後、昭和十七年まで、約六十年間に亘つて、頼母子講を繰返し結成して、それによつて造成されたものである。

五 江戸時代の荒廢

江戸時代といつても、慶長十二年（一六〇七）のこと。『日本切支丹史』の著者は、神

父レオン・パジェスが鎌倉を訪れた記事を載せている。富士山と浅間神社とのことを記した次に

「彼等（神父の一行）は、駿河から伊豆を経て、さらに相模に入った。ここには、日本の旧都で、公方すなわち將軍の居所であった鎌倉の町がある。鎌倉は、もと戸数二十万に上ったが、当時は減じて、漸く五百戸位であった。神父はここに滞在すること二日、古蹟を見物した。就中、青銅の巨大なる偶像が田圃の中に放棄され、野鳥の巢となつているのに目をとめた」

としている。神父様が偶像というのも止むを得ないこと、然し、仏像は庶民からは尊崇されていたらしく、その後、慶長十八年（一六一三）九月に長崎から江戸に下った英人、キャプテン・ジョン・セーリスは、日記の中で、駿河と江戸の中間の鎌倉で大仏を見たとし、一般の人々は「ホトケサン」として敬い、前を通る時は礼（おじぎ）をするとしている。彼は友人と大仏像の胎内に入り、大声を出して反響させ、胎内に自分達の名を記したとも記している。先年英国に帰られたブッシュユさん、何度も精査されたが、セーリスの署名は見つからなかった。元和二年（一六一六）には、平戸商館長、英人リチャ

ード・コックスが参拝し、西欧人の率直な驚嘆の声を上げたというが、筆者は未だ文を見ていないので、ここに詳しく紹介が出来ないのは残念である。

さて、これらの記事で、江戸初期には、既に露坐のまま、田圃の中に仏像のみ孤立した状態となっていたことが知られる。背中に、鑄造時に原型の土を取り出した窓があり、開き扉が二枚ついているが、その扉も盗まれそうになって、元禄時代まで、建長寺が仏像を監理し、扉も外して建長寺の倉庫に預かっていたという記録がある。仏体もその頃には可成り損傷していたということである。

これを復旧し、大仏像の参道の入口近くに地を求め、小堂を作り、住僧を置いて、日々の読経供養をさせたのは、元禄十六年（一七〇三）である。この小堂の土地代が五〇文というから二坪あるかなしのものであったと思われるが、このようにしたのは、芝増上寺の祐上人と弟子の養国上人で、資金を出したのは、江戸の商人野島新左衛門であった。大仏殿を大異山高徳院浄泉寺と称するのは、その野島氏が何処からか、古い山門を買ってきて、参道に立てて以来である。仏像は大きい、寺院という程のものではなかったようである。

終りに、鎌倉大仏は、現在地で鑄造されたと考えざるを得ないし、近所に「鑄た畑」という地名があり、地金を溶した場所も推定されている。然し乍ら千葉県の木更津市に編入された旧鎌足村の人々は、鎌倉大仏は、同村で断片的に鑄込んで、海上を通ずる鎌倉街道から、鎌倉に運んで組み立てたと主張する。そして鑄造場所という所もある。鎌倉の「鑄た畑」等は現地鎌倉で組み立て（鑄がらぐり）のために、溶接用の銅をとかすのに使ったに過ぎないとする。『鎌足村誌』に、

「建長四年八月、改めて金銅の仏像を鑄た。その鑄工は鎌足村矢那の住人大野五郎右衛門云云」

とする。寺伝でも此の鑄工の名だけは口伝されているが、いつ頃からのことかは判らない。然し、今日の史家も、美術研究家も、共に鎌足村鑄造の説を認めないが、大野氏の一族や旧鎌足村の人達は今もなお、この主張に熱心である。

鎌倉大仏由来

鎌倉大佛殿高德院第十四世住職 佐藤 行信

この阿弥陀如来像は鎌倉大仏殿高德院の本尊であります。すでに明治三十年（一八九七）に国宝に指定されていましたが、第二次大戦後、文化財保護法の発布によって昭和三十三年（一九五八）新法による国宝に指定されました。

この大仏の造立は、主として民衆の力によったものでありまして、多少幕府の援助を受けたかも知れませんが、奈良の大仏が国家的事業としてできたのとはいろいろな点で比較できます。

まずその発願者はだれであるかがわかりません。寺伝では、建久六年（一一九五）三月、頼朝は、妻政子および嫡子頼家らを伴って奈良大仏の落慶供養に参列したとき、深い肝銘を受け、関東にも大仏を造立することを発願しましたが、これを果さず、頼朝は薨

じました。先に南都大仏の落慶供養にも扈從こじやうした政子の侍女稲多野局という者が、頼朝生前の祈願を果さんと欲し、鎌倉鶴岡八幡宮に祈念して、資金の調達に苦勞し、政子もこれに助縁しました。やがて將軍頼經は、浄光を鎌倉大仏の勸進上人に命じたとされています。

鎌倉大仏のことが、『吾妻鏡』（東鑑）に見え始めますのは、暦仁元年（一一三三）で、最初の記事は、「三月二十三日、今日相模国深沢里、大仏堂事始めなり、僧浄光尊卑縑素に勸進して、この営作を企つ云々」とあります。

この大仏が浄光の企てになったことは、この『吾妻鏡』の記述によって推定されます。彼は遠江の国の人で、おそらくこの時代の熱烈な念仏聖の一人であったと想像されます。後に鎌倉光明寺を開いた然阿良忠が、東国遍歴の末、鎌倉に来て彼を尋ねたところ、助けたい志は切であるが、大仏造営いまだ成らざるため、志のようにできないのは残念だと謝して、然阿らに食を勧め、一字を造っておらしめた、という記事（辻善之助『日本仏教史』中世篇之一）があります。

『吾妻鏡』の次の記事は、暦仁元年（一一三三）、「五月十八日、相模国深沢里大仏御頭

を挙げ奉る、周八丈也」というので、この時すでに仏体ができていて、最後に御頭を挙げたものと思われず。この周八丈とあるのは、多分周囲が八丈あるという意味だと思います。その後三年、仁治二年（一二四一）「三月二十七日大仏殿上棟」の記事が出て来ます。また同年四月二十九日、大仏殿造営寄進のために、囚人逐電、預人罪科に対する過怠料を徴集した記事がみえます。次に二年後の寛元元年（一二四三）六月十六日には、「深沢村に一字精舎を建立、八丈余の阿弥陀像を安じ今日に供養を展ぶ。導師卿僧正良信、讚衆十人、勸進聖人浄光房、此六年之間、都鄙を勸進し尊卑奉加せざるなし」と書いてあります。この像は木像であったか、塑像であったかは『吾妻鏡』に書いてありませんが、『東関紀行』には木像であったことが記されています。また導師のほか讚衆十人と書いてあります。いかにも寂しい大仏供養であることから考えて、その当時の堂舎はきわめて質素なものであったと思われず。建久六年（一一九五）に行われた奈良大仏の復興に伴う大仏供養は、千僧百官が参加し、鎌倉から頼朝が二百余人の軍兵を率いてこれに参列した、という豪華極まるものであったようですから、この両大仏の成立ちに大差のあることがわかります。

次に建長四年（一一五二）八月十七日の記事に、「今日彼岸第七日に当る。深沢の里に金銅八丈の釈迦如来像を鑄始め奉る」とあります。ただし、現状は定印を結ぶ阿弥陀如来の姿で、釈迦如来と見ることはできません。

鎌倉大仏の縁起はよくわかりません。殊に木造の大仏ができてから、わずか九年後に同じ場所で、金銅仏を造り始めたことの経緯が明瞭ではありません。宝治元年（一二四七）、すなわち、大仏殿供養の四年後に、鎌倉地方に大風があり、仏閣人家多数顛倒と『吾妻鏡』にあります。この時、大仏や大仏殿に大損害をこうむったので、むしろ木造をやめて金銅仏を造ろうということになり、今のものができたのだらう、と考える人があります。しかし、そう簡単に金銅仏が造れるものでしょうか。約三万貫の銅材料を集めるだけでも大変な仕事でありましょう。当時はわが国の銅山が衰微していた時代だからなおさらのことです。こう考えますと、浄光上人は、最初から金銅仏を目指していたのであり、木造仏と大仏殿は仮りのものではなかったかと想像されます。しかしこの事情を明らかにする史料はありません。

この浄光上人の勸進は、日本国中の男女四十五億九千六百五十九人に、人別一文錢（計四万五百八十九貫）を許すことを計画し、先ず東海・東山・山陽・山陰については下知を得ていましたが、重ねてさらに北陸・西海にも下知を賜わるように願っています。また幕府にも、援助してもらっているようで、『吾妻鏡』の仁治二年（一二四一）四月二十九日の条には、囚人逃亡の際、その預人より過怠料を徴して、新大仏造営料に寄進させることを定め、新田太郎政義に三千疋、毛呂五郎入道蓮光に五千疋を各々八月中に弁償するように命じているのが見えるのは、その一端を示すものであります。

このような熱烈な念仏聖であった浄光によって企てられた鎌倉大仏は、阿弥陀如来であったことは当然のことで、延応元年（一二三九）の彼の言上状（一条家本『古今秘抄裏書』）にも「所念者西方極樂之教主也」と記されております。それではなぜ、『吾妻鏡』に釈迦如来像を鋳始め奉るとあるのでしょうか。平子擇嶺氏の「鎌倉時代美術」という文章（『鎌倉文明史論』の内）をみると、「吾妻鏡が阿弥陀を釈迦と記したのは全く吾妻鏡のずさんである。釈迦の定印と弥陀の定印とは、ほとんど同じ姿勢で、ただ両手を膝の上に置いて、人さし指を曲げるか曲げないかの差であるから、一寸素人には間違いや

すい。吾妻鏡の記者の書き誤ったのは無理とはいえない。現に『新編鎌倉志』がこの像を寺に伝えて弥陀というは誤りで、盧舎那仏であると至極念入りに誤っているのを見るべし」といつておられます。平子氏は簡単に『吾妻鏡』記者のずさんだと断定しておられますが、公の記録に準ずる『吾妻鏡』のことであるから、何かの都合でわざとそう書きかえたかも知れません。建長年代前後のわが国の仏教界は、大きな転換期にあつて、京都のほうでは華嚴・天台・真言等、旧来の宗派が勢いをもりかえし、朝廷、公家の間に浸透して、加持祈祷を盛んに行なつていました。一方、鎌倉のほうでは浄土教が、武士や庶民の間に信者を増しつつありました。しかし建長四年頃になりますと、執権以下要人・武士は禅宗の教義に惹かれるようになり、建長五年（一二五三）には執権時頼の発願による建長寺が建立され、つづいて弘安五年（一二八二）には時宗により円覚寺が創建されました。幕府としては政治的意図もあつて、はじめは浄土教を、後には禅宗を庇護する立場にあつたようにみえます。建長四年頃には幕府としては浄土教の寺院仏像よりは禅宗的なものに援助するということのほうが、彼の評定衆などの議もまともやすかつたのでありましょう。それで幕府の公文書に釈迦如来ができることになつたので

ないかと思われます。これについて思い出すのは、与謝野晶子の有名な句にも「かまくらやみほとけなれど釈迦牟尼は」と詠んでおることであります。晶子は『吾妻鏡』の注釈書に關係していたほどの人ですから、『吾妻鏡』を尊重して釈迦としたと思ひます。晶子も大仏が釈迦でないのが氣になつていたと見え、かの句の釈迦牟尼をやめて、「かまくらやみほとけなれど御姿の美男におわす夏木立かな」という和歌をつくつたらしく、その短冊が現在高德院に所蔵されています。

鎌倉大仏は、下より順次階を重ねるやうに、かなり大きな中で鑄継がれ、その間巧妙な鑄からくりが施されてゐるもので、軀部は大きく別けても七乃至八段、頭部は前面七段、背面五段に鑄継目が認められます。殊に下腹部から胸前のごとき上下五尺幅に及ぶ間が、正背二度に分けるのみでそれぞれ一挙に鑄成されており、その明快かつ大胆とさえいえる優れた技法は、本像が統制のとれた鑄物師集團によつて順調に工事が進められたことを想像させます。この鑄造師の一員として丹治久友の名をあげることができます。文永元年（一二六四）にできた吉野、金峯山寺蔵王堂の梵鐘には、「鎌倉新大仏鑄物師丹治久友」の銘があつたことが判明しております。また寺伝では、大野五郎右衛門の名も

みえます。

大仏は、完成後その管理は別当職がこれに当たったようで、弘安七年（一二八四）には有名な極楽寺の忍性菩薩良観が『性公大徳譜』によると大仏別当に補されています。正徳二年（一七二二）に高德院が創立されるまでは、建長寺（臨済宗）、浄土宗の光明寺などで別当をしていた様子であります。しかし各の年代は明瞭ではありません。また名越の善光寺という寺（現存せず、宗派も不明）が大仏造営に関係があったらしいことが、金沢文庫の古文書にみえていますが、詳しいことはわかりません。これについて嘉暦三年（一三三二）十二月二日の金沢貞顕の書状があります。

（前略） 関東大仏造営料唐船事、明春可渡宋之間、大勸進名越善光寺長老御使道妙房年
内可上洛候（後略）

これは関東大仏造営料唐船が明春渡宋するについて、大勸進名越善光寺の御使道妙房が年内に上洛するはずだという意味であります。しかし、建長四年（一二五二）に造営を始めたものが、この時に至るまで十数年間も未完であったとは考えられません。建武二年（一三三五）には、大仏殿が大風のために倒れ、内に避難していた軍兵が多数圧死

したことが『太平記』にあるのをみると、右の貿易を計画した時には、大仏や大仏殿はまがりなりにも形ができていたろうと思われれます。次に応安二年（一三六九）に大風で堂宇が崩壊しましたが、文明十八年（一四八六）頃には堂宇なくして露坐であった、と『梅花無尽蔵』という書に記してあります。明応四年（一四九五）に至り「大地震、洪水のため大仏殿堂舎を破る」と『鎌倉大日記』が記していますが、この明応四年の地震と津波は『鎌倉大日記』以外に記録がありません。これは多分、明応七年（一四九八）の地震のことを、大日記の記者が間違えたのだらうという説が強いのであります。明応七年の地震は非常に大きかったらしく、多数の記録があります。『八幡宮長帳』には「鎌倉由井海水涌大仏殿まで上る」とだけ書いてあります。『鎌倉大日記』には、明応四年、「大地震洪水、鎌倉由比浜海水到千度檀、水勢大仏殿破堂屋云々」と記していますから、これは多分七年の誤りであります。これまで述べたように、建長四年（一二五二）铸造にとりかかったことは明らかですが、それがいつ完成したか全く知ることができません。堂宇の建造についてはほとんどわかりません。最初に破壊のことが記されたのは、建武二年（一三三五）で、殿堂ができあがってから七十年前後でなかったかと想像されます。

それからわずか三十四年後、また破壊のことが記されています。このように二度も大風で倒れ、最後は津波で破損したようにとれますが、これだけの事実から察せられますことは、当初の殿堂もそれほど丈夫なものでなく、その後再建されたものも、かなり粗末な建物であつたろうと想像されます。明応四年（一四九五）以後は堂宇建造のことがなく、今日まで約四百八十年以上も経過しています。前にも百余年間、堂宇のない時代があつたように思われますから、この仏像は堂宇のあつたのは前後百五十年くらいで、あとは露坐であります。その後、元禄十六年（一七〇三）に地震で台座の石壇が崩れ、三尺下に傾くということがあります、また大正十二年（一九二三）の地震では、台座前方一尺沈下、仏体一尺三寸前方に迂り出す、ということがありましたが、二度とも仏体には大きな損傷がなくてすみました。

現在高徳院には、『鎌倉大仏縁起』（上下二巻）があります。その末尾の文によりますと、享保二十年（一七三五）正月に当寺の住職養国の撰するもので、その渉獵した各種史料の他、寺伝および民間伝承、伝説の類をも広く採集して記述したものであります。下巻において、当寺中興開山顕誉祐天に関すること、最高の檀越野島新左衛門泰祐に関

することが詳しく述べられています。もとより縁起であり、歴史的事実とほど遠いものも少くありませんが、鎌倉大仏の沿革の大筋と、これにまつわる伝承のかずかずを伝え、民間伝承や民俗学の上からも興味のある資料が盛られております。

たとえば近世における元禄十六年（一七〇三）十一月二十三日の大地震による大仏の破損と、祐天・養国両上人による復興・修造の事蹟などであります。祐天上人の復興は、正徳二年（一七一二）を中心とする数年間のことで、『大仏高德院略記』によりますと、正徳元年以前、先ず台座の修復が行われ、正徳二年にいたり、江戸浅草の野島新左衛門の寄進を得て復興が行われ、同三月十五日には高德院の堂舎も完成し、入仏供養の儀が執行されました。現在大仏の前にある銅灯籠に、「正徳二年正月十三日野島新左衛門寄進、鑄物師大田駿河守正儀」の鑄出銘があり、当時の鑄掛修理も同人によって施工されたようであります。なお享保十九年（一七三四）の江戸寺社奉行宛の訴状によりますと、祐天は大仏廻りの伽藍礎石を遺す田畑を百姓から買い求めたり、また正徳二年五月二十五日には長谷寺支配から光明寺末にするなど、着々復興を進めております。養国上人が高徳院住持となったのは、享保十八年（一七三三）三月一日のことで、当時鳥類の巢とな

つていた大仏修補の大願をおこしました。そして養国は大仏の鑄掛修理のために、江戸町内毎月七年托鉢を願って同二十七日許可を得ました。そして二十年には、先ず白銀の白毫相と銅製の肉髻相が完成しました。翌二十一年二月には、かねてより建長寺長好院に保管されていた大仏背後の銅扉二枚が高徳院に寄進されました。また同年江戸神田鍋町の西村和泉守によって大仏蓮華座が鑄造されましたが、この蓮弁は三枚のみでき、あとは挫折したようです。現在大仏の背後に祀られております。元文二年（一七三七）に至って、いよいよ、大仏仏身の修理が行われました。西村和泉守が修造にとりかかり、職人・人足・鳶合せて百六十人で行なつたといわれています。修理は、螺髪部や背後の扉の取付、方々の穴の鑄懸修理だつたと推定され、三ヵ月後の七月十八日に開眼供養が行われた、と『大仏尊再興記』に書いてあります。

その後、養国上人は、蓮華座の完成等に心をそそぐことになり、元文四年（一七三九）九月十八日には明年よりさらに七年間引続き江戸町内を托鉢することを許されました。そして翌五年三月二十日に、従来の金杉一丁目の借店より、新しく普請された板倉の勧進所に移り、総本山知恩院などの後援によって始められた十万人講の取立てに努力しま

した。そして四月十日には、『大仏尊再興記』によりますと、常設決願（勸化所縁起講釈願）を当時の寺社奉行、大岡越前守に提出いたしました。しかるに本山増上寺の尊誉了般僧正の忌諱にふれて計画を進めることができなくなり、ついに大仏復興の仕事は途中で廃せざるを得なくなってしまったのであります。

明治以後の修理は、関東大震災の被害の時、大正十三年（一九二四）に仏像を台座に固定せしめる耐震構造の修復を行い、翌年完成しました。そして最近の修理は昭和三十四年（一九五九）、文化財保護法による国庫補助修理が行われ、頸部補強、つまり頸部の力を強化プラスチックで補強し、耐震構造を改め、大地震の際は台座と仏体が離れる免震構造が施されました。この強化プラスチックの利用と台座の免震構造は、日本の文化財としては初めてのものでした。

また、外人の見た記事としては、慶長十八年（一六一三）、英人キャプテン・ジョン・セーリスは大仏のことをガウンを着けた姿といい、旅行者だけがその表面に文字や記号をたくさん書きつけているのが目についた、と記しています。また、ついでセーリスと一緒に来朝し、平戸の商館長をしていたリチャード・コックスは、元和二年（一六一六）

十月十八日の日記に、自分が一番感嘆したのはダイブツと呼ばれる巨大な真鑄の偶像をみたこと、と書いております。

この大仏は、その円満な姿には東洋的なほほえみと静寂さが感じられる、というのが仏像として世界的批評になっています。大仏像の内部が他の鑄造物に比べて珍しくきれいで、継目も判然として鑄造のあとにも完全にみられるのが特徴であります。そして遠近法の採用により、上体が下部よりも割合が大きく、胴体も幅広く、座高は普通人よりも $\frac{1}{4}$ ほど短い分量で造られており、頭部も大きくできております。ただ光背や蓮台を作る経済力がなかったようです。青銅仏身高一・三一二m、体重一二二t（三二、六七〇貫）です。

あとがき

平成六年「鎌倉大仏史研究会」が発足した。数人の研究者が、鎌倉大仏に関する資料を蒐集して多面的に鎌倉大仏の研究を積み重ねていこうとの趣旨で創立されたものである。それはたまたま私の親しい友人である佐藤行雄君（前国連大使）が、行雄君の父上第十三世佐藤密雄師、兄十四世佐藤行信師にその趣旨を伝えたことから始まったのである。研究会は、不定期ながら内容のある討議を続けて今日にいたっている。

そして、本年は、鎌倉大仏の鑄造が始められてからちよūd七百五十年の節目に当り、第十五世佐藤孝雄師の晋山儀という賀事を迎えたことを記念して、史料的にも貴重な『鎌倉大仏縁起』を翻刻する事業の計画がもちあがった。『鎌倉大仏縁起』は、かつて佐藤行信師が翻刻され、今日まで高德院の寺史としてまた歴史的価値のある縁起書として高い評価を受けてきた。今回その残部が少なくなり、研究もはるかに進展したので「鎌倉大仏史研究会」が改めて校訂し、細かい補注を付して出版するはこびになったのである。

惜しむらくは、佐藤行信師が平成十年十月二十七日に、佐藤密雄師が平成十二年六月十五日に相次いで遷化されてしまったことである。両師とも鎌倉大佛殿高德院住職として大仏の保存・修復に尽力され、大仏史研究の進展にも意欲をもたれていただけに哀惜に堪え

ないところである。

「鎌倉大仏史研究会」（以下の五人によって構成される）がこの縁起を改定して出版するについては、同会の鈴木良明氏が編集委員長として全体のまとめと解題の執筆をおこない、研究会のメンバーである清水眞澄（成城大学教授）、鈴木良明（神奈川県立歴史博物館学芸員）、高橋秀榮（神奈川県立金沢文庫長）、福島金治（愛知学院大学教授）、吉原健一郎（成城大学教授）の五人全員が編集委員となつて校訂と百二十一項目の補注の執筆にあつた。

出版にいたるまでには、多くの方々のご教示、ご協力をいただいた。いずれに対しても心からの御礼を申し上げる次第である。

平成十四年十月吉日

鎌倉大仏史研究会代表 清水眞澄

鎌倉大仏縁起

発行日 平成十四年十月二十六日

発行 鎌倉大佛殿高德院

鎌倉市長谷四―二―二八

〇四六七―二二―〇七〇三

編集 鎌倉大仏史研究会

製作 株式会社便利堂

題字 第十三世住職 佐藤密雄

口絵写真 井上久美子